

ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第1号



ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第1号

ものがたり観光行動学会

Association for the Study and Practice of Narrative Tourism

創刊の辞 白幡洋三郎	3
■ 講演	
瀬戸内海物語／西田正憲	5
A Story of the Seto Inland Sea / NISHIDA Masanori	
瀬戸内を旅すれば／神崎宣武	14
If Traveling the Seto Inland Sea / KANZAKI Noritake	
エッセイ 1 「ただいま」と言える温泉地／奥坊一広	24
エッセイ 2 高齢社会と観光～旅は元気で長生きするための特効薬～／井村日登美	25
エッセイ 3 観光を表現することば／野崎英之	26
■ 研究論文	
物語観光の意義とその推進方策についての考察／大黒伊勢夫	28
On the Significance and Promotion of Narrative Tourism / DAIKOKU Iseo	
遠い観光, 近い観光 — 吉田初三郎の俯瞰図にあらわれた観光 — / 白幡洋三郎	39
Travel Afar and Trips Close to Home: Tourism in the Bird's-Eye View Maps of Yoshida Hatsusaburo / SHIRAHATA Youzaburo	
「ものがたり」に触発される観光行動／高田公理	52
Tourism Touched Off by Narratives / TAKADA Yasutaka	
観光の地域産業化／李 有師	61
Localization of Tourist Industries / LEE Yuuji	
<small>注:参考文献の表記は執筆要領で「文末に一括」と取り決めてあったが, 査読過程で「ページごとが望ましい」と再提起があった。このことから, 今号だけの特例で, 1 篇をこれにあてた。今後, 編集委員会で, いずれかに再統一する。この決定は本学会ホームページ上で速やかに公開する。</small>	
■ 研究ノート	
関西における観光振興の課題と提言 — 関西意識と府県ブランドの共存と対立 — / 山中鹿次	70
Coexistence and Opposition in Promoting Kansai Tourism: The Problems and a Proposal for Regional Consciousness and Prefecture Place Branding / YAMANAKA Shikatsugu	
最新の『NHK 意識調査』から読み取れる, 若者のアニメ聖地巡礼行動／奥野圭太郎	75
Understanding Japanese Youth Pilgrimages to Sacred Places in Anime: Observations from NHK Public Surveys / OKUNO Keitaro	
編集規程および執筆要領について 概要	78
編集後記／役員名簿	79

創刊の辞

本学会論文誌創刊の意図は「観光」を論じた読み物をつくることである。

「観光」は地域や学問領域を越えたたのしみであり、学ぶよろこびである。共通のたのしみやよろこびを「読み物」として会員に伝えるために印刷物として配布することは学会に求められている任務だと考えた。

学会員共通の関心をかき立て、共通の課題に応える「読み物」をつくりたい。そして「読み物」であるから研究者以外の一般の人々にも知ってもらい、読んでもらいたい。学会にふさわしい学問的な内容を備え、学術論文の体裁をもった堅めの読み物も、事例報告やエッセーなど柔らかめの読み物も収めたい。書きたい人の熱い思いを受けとめる場も必要だ。こうしてこのような学会誌が誕生した。

投稿する人も手にとって読む人も共通の関心は「読み物」である。すなわち書き手には、人に読ませようとする配慮、読んでほしいという情熱、が求められる。一方、読み手には読み物として妥当かどうか、わかってもらおうとの努力、気配りがあるかどうか、の吟味をお願いしたい。書き手と読み手の双方が求めるものの中に本誌の輝きは生まれるだろう。

『ものがたり観光行動学会』には、呼びかけに応じて、物語が好き、歴史が好き、人が好き、遊びが好き、そんな人々が集まってきた。そしてメンバーが納得できる舞台づくり、環境づくりに取り組んできた。

若い世代には、何か文章を書いて投稿できる媒体が欲しいという声が強い。ここに誕生したのは、まとまった考えを發表したい、聞いて欲しい、読んでほしい、意見をたたかわせたいという思いを持つ人に提供される新たな場所である。

2011年10月1日

ものがたり観光行動学会 会長 白幡洋三郎

2010年4月17日ものがたり観光シンポジウム
「フジヤマから瀬戸内へ」基調講演

瀬戸内海の物語

西田正憲*

From Fujiyama to the Seto Inland Sea, Symposium for Narrative Tourism (Apr. 17, 2010)
Keynote Lecture: "A Story of the Seto Inland Sea"

NISHIDA Masanori

1. 六十余州名所図会と長崎行役日記

瀬戸内海には物語が蓄積している。これから、「瀬戸内海の物語」と題して、近世、近代、現代の風景の物語について紹介したい。駆け足の旅になるが、過去の絵画や紀行文をたどる瀬戸内海の旅に出かけたい。

江戸時代、広重が浮世絵版画『六十余州名所図会』で全国の名所の風景を描きだす。ちょうど黒船でアメリカのペリーがやってきた幕末の1853（嘉永6）年、広重が晩年の57歳の頃から、数年かけて描いた一連の作である。当時の我が国における60余りの諸国について、代表的名所を各国1カ所ずつ描いている。現在の大阪湾に位置する「摂津 住よし 出見のはま」（図1）と「和泉 高師のはま」（図2）は、どちらも一大名所で、美しい白砂の海岸、松林、そして高灯籠、茶店などの風景が描かれている。「出見のはま」はハマグリやシジミがたくさん取れ、人々が磯遊びをした場所であるが、残念ながら現在は埋立てで風景が大きく変わってしまった。帆柱を立てた船が瀬戸内海を走り、遠くに淡路島、明石海峡が見え、右には六甲山の山並みが連なっている。多くの船がちょうど大阪湾を出ていく風景を描いている。

このような風景を印象深い文章で表現した紀行文もある。1767（明和4）年の長久保赤水の『長崎行役日記』は次のようにする。

漸く日出四方明けぬれば、北には甲山、武庫、六甲、摩耶の山々



図1 出見の浜



図2 高師の浜

* 奈良県立大学地域創造学部

天をささへ、兵庫の岬、須磨の浦、しほやの煙風になびく。(中略)
前後左右遠近に大小の船数十艘、風帆飄々として算を乱して漕
つらぬ。眺望の景筆にも尽しがたし。(柳田 1930)

「算を乱す」とは船がいっぱい出ているということであり、大
阪湾にはこのような賑やかな船の風景があった。

長久保赤水という人物は、常陸の国、現在の茨城県の庄屋の
代理だった人で、この『長崎行役日記』の旅は、常陸の海から
ベトナムに漂流した農民を長崎にもらいうけに出むく旅であり、
重責を担う旅であった。最初、この紀行文を読んだとき、何と
はつらつとした清新な文章だろうと感心したが、赤水がすでに
51歳に達していた旅の記録であった。若々しさに驚いたが、の
ちに赤水は日本の地図を編纂するなど、地理学の大家となる。
『六十余州名所図会』を見ると、舞子の浜、金毘羅山、厳島、鳴
門、和歌の浦など瀬戸内海に名所が蓄積していることがわかる。
兵庫の舞子の浜は、松林のマツの木が、踊り子の舞うようにく
ねくねと曲がっているので、「舞子」の浜と称した。香川の金毘
羅山は象頭山とも言うが、ゾウの頭の形をしているように見え
るところからきている。この『六十余州名所図会』には広島県の
鞆の浦の近くに位置する阿伏兔^{あぶと}観音も描かれている(図3)。実
際はそう高くない海岸の丘であるが(図4)、当時は、海上の間
近から見ると、おそらくこの絵のように聳え立つように見えた
のであろうと想像される。当時の紀行文を読んでいると、ちょっ
とした高台に登っても非常に高い所に登ったように書いてあり、
おそらく阿伏兔観音の高台も、当時の人々の感覚としては、こ
の絵のように高い感じがしたのだらうと考えられる。



図3 阿伏兔観音



図4 阿伏兔観音

2. 日東第一形勝

広重の『六十余州名所図会』は日本各地の図絵や真景図をもとにして描かれていた。『東
海道五十三次』で名をなした広重は京都より西に旅したことはなく、瀬戸内海とは無縁で
あった。広重は実景を見ることなく、既存の絵をもとに自由自在に構図を変えて描いてい
る。広重の『六十余州名所図会』の種本になったもとの絵の一つに『山水奇観』という図
会がある。そのなかの「須磨明石浦」の絵には、明石海峡から大阪湾方向を見て、明石、
須磨、淡路島、明石海峡が美しく描かれている(図5)。『山水奇観』は、淵上^{きよつこう}旭江によって、
1800(寛政12)年頃に描かれたものである。広重の『六十余州名所図会』の半世紀ぐら

い前である。旭江は岡山の人で、各地の「真景」を描こうと23年間かけて全国を旅した人物である。それまでの名所絵は真実の風景「真景」を描いていなかった。この『山水奇観』には、岡山の豪溪と小豆島の寒霞溪も描かれている(図6)。豪溪と寒霞溪は、江戸後期に見いだされ、明治時代には「瀬戸内の二大奇勝」と呼ばれた名所である。豪溪は『六十余州名所図会』にも登場するが、豪溪も寒霞溪も奇岩怪石の風景である。寒霞溪は奇峰と紅葉の名所として知られているが、豪溪は小さな溪流で現代人の眼にはいささか物足りない観光地であり、なぜ二大奇勝なのか、なぜこのような奇岩怪石の風景が良かったのか疑問に思われるところである。

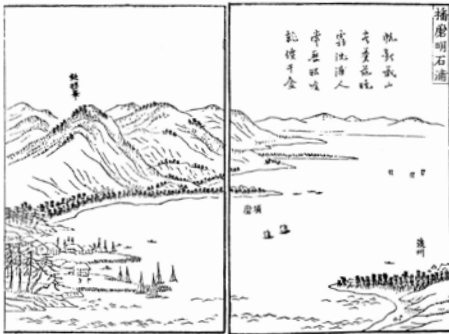


図5 『山水奇観』須磨明石浦



図6 『山水奇観』豪溪

瀬戸内海の鞆の浦は江戸時代に來日した朝鮮通信使が「日東第一形勝」と称した所である。彼らは富士山や琵琶湖をはじめとして日本各地の風景を見たが、鞆の浦こそが日本一の風景だと讃えた。鞆の浦は仙酔島などの風景が美しく、確かに風光明媚ではあるが、日本一と言いきるのは不思議な気がする。しかし、これは、中国文学に出てくる名所の風景に見立てた見方なのである。中国文学に描かれた風景を想像して、きっとこのような場所の風景とそっくりなのだろうと勝手に思いこむわけである。鞆の浦は高台の福禅寺対潮楼から瀬戸内海を眺めるが、この見方は漢詩文に表れる高台の岳陽楼から見る洞庭湖の見方に酷似している。洞庭湖は中国随一の名所であるから、鞆の浦は日本一だとみなすこととなる。漢詩文に表れる洞庭湖にきっと似ているから、日本一だと言ったのである。

実は、豪溪や寒霞溪も、江戸後期の儒学者や漢学者たちが中国文学に表れる風景に見立てて、見いだしたものである。明石、須磨などの歌枕の地が国文学の風景だとすれば、豪溪や寒霞溪などの奇岩怪石の風景は漢文学の風景と指摘でき、中国文学に出てきた場所を漢学者たちが勝手に想像して、きっとこと同じだろうと名所化したものである。しかし、そこには誤解があった。豪溪は中国の武夷山に見立てたが、武夷山は現在世界複合遺産に登録されており、景観も規模も豪溪とは基本的に異なっている。

3. 世界第一ノ景

19世紀の近代になるとこのような江戸時代までの風景の見方が根本から変わる。欧米人のロマン主義的な自然讃美が入ってくる。欧米人が瀬戸内海の新たな見方をはじめ。それまでの日本人の見方を伝統的風景観と称すれば、この欧米人の見方は近代的風景観と言えよう。オールコックの『大君の都』(1863)は五剣山と屋島の地形を捉える(図7)。五剣山と屋島は日本人にとっては信仰の地であり、源平合戦の地であったが、欧米人にとっては熔岩円頂丘と溶岩台地の奇妙な形をした地形になる。故事来歴の風景から火山地形の風景へと見方が変る。アンペールの『日本図絵』(1870)も下関の港町の風景を捉える(図8)。ドイツ人でオランダ商館員であったシーボルトはそのような欧米人のロマン主義的な見方で日本の風景を賛美した最初の人々の一人である。彼は1826(文政6)年の江戸参府の旅で瀬戸内海を絶賛して、「日本におけるこれまでの滞在中もっとも楽しみが多い日々を送った」と述べている(斉藤1967)。穏やかな内海、落日の光に輝く多島海、温かな気候、美しい自然、緑色や金色の畑、さらに、集落、港町、段々畑などの人文景観や生活景観を絶賛した。

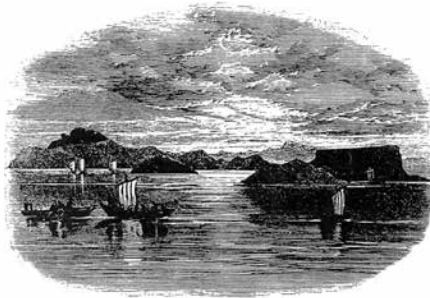


図7 『大君の都』兵庫付近



図8 『日本図絵』関門海峡と下関

明治時代、欧米人の瀬戸内海絶賛がほとぼしる。1872(明治5)年、トーマス・クックが世界一周旅行で日本に立ちより、瀬戸内海を航行して絶賛する。彼は近代旅行業の祖と呼ばれるイギリス人であり、鉄道旅行による団体旅行や万博旅行をはじめた人物である。瀬戸内海はある意味でラッキーであった。1868(旧暦慶應3)年、サンフランシスコから横浜、神戸、長崎を経て上海へと通じる、アメリカー中国の太平洋定期航路に瀬戸内海が組みこまれる。世界的な重要な交通網に瀬戸内海が位置したわけである。これによって、グローブ Trotter と呼ばれる世界漫遊旅行家たちの眼に必ず瀬戸内海が捉えられる。翌1869(明治2)年には、スエズ運河やアメリカ大陸横断鉄道が開通し、世界一周旅行が普及する。トーマス・クックが世界一周旅行で来日したときはちょうどジュール・ヴェルヌの小説『80日間世界一周』が新聞に連載された年でもある。このような世界的な交通

網や観光の興隆、さらに言えば、新聞やガイドブックなどのマスメディアによる世界的な情報の普及のなかで、瀬戸内海は世界的名声を得ていく。

シルクロードという名前を命名したドイツの地理学者リヒトホーフエンは、1868（慶應4）年に日本に立ちより、没後の1907（明治40）年に出版された旅行記で、瀬戸内海を絶賛しながらも、次のようにしるす。

かくも長い間保たれてきたこの状態が今後も永続するよう祈りたい。この最大の敵は、文明とこれまで知らなかった欲望の出現である。（リヒトホーフエン 1943）

のちの20世紀における高度経済成長期の臨海工業地帯の出現を見通したかのような慧眼である。

日本人はこのような瀬戸内海に対する欧米人の絶賛を知って驚く。岩倉具視の使節団が1871～73（明治4～6）年に米欧に赴き、その報告書『特命全権大使米欧回覧実記』が久米邦武執筆で1878（明治11）に出される。この報告書の扉に岩倉具視の揮毫「観光」が載せられているが、これは現代の「観光」の意ではなく、米欧の文明の光を見てきたという意味合いであろう。この報告書は次のように伝える。

日本瀬戸内ノ景ノ如キハ、世界ニ希ナリ。西洋ニテ之ヲ世界第一ノ景ト称スルトナリ。（久米 1985）

日本人は、西洋の人々が瀬戸内海を世界一の風景だと言っていることに驚き、認識を新たにする。

4. 世界の宝石

瀬戸内海の海域の捉え方、瀬戸内海観は、「灘→瀬戸内→瀬戸内海」と変わってきたと指摘できる。かつて瀬戸内海は和泉灘、播磨灘、燧灘、備後灘、安芸灘、伊予灘、周防灘と小さな海域「灘」の集合であった。やがて、17世紀の江戸前期に北前船が西回り航路に就航しはじめると、広い海域概念を必要としたのであろう、芸予諸島辺りを「瀬戸内」と呼びはじめる。19世紀にやってきた欧米人は最初から瀬戸内海を一つの内海と捉え、瀬戸内海をInland Sea（内海）に定冠詞を付けてThe Inland Seaと名付け、そして、その風景を絶賛した。日本人はこれを知って、それまで広域の名前がなかった海域を呼ぶために、明治初年に翻訳語「瀬戸内海」を編みだした。

瀬戸内海観の変化は風景の賛美と歩調を合わせ、瀬戸内海観と風景観が一体的に変化する。日本人の中にもやがて「瀬戸内海は世界の宝石」と言う人物が出てくる。広域の海域を捉える瀬戸内海観ができると同時に、近代的風景観で瀬戸内海の美しさや素晴らしさが認識される。「瀬戸内海は世界の宝石」と言った人物は新渡戸稲造である。彼は国際連盟の事務次長にまでなった国際人であった。この「瀬戸内海は世界の宝石」は、1911（明治44）年の小西和かなうの大著『瀬戸内海論』（小西 1973）の序に寄せられた文章である。新渡戸

と小西は札幌農学校での師弟関係にあり、小西が札幌農学校で学んでいたときに新渡戸は教官であった。このころ、「瀬戸内海」という名前が定着し、瀬戸内海という一つのまとまった美しい海域が認識されていったと指摘できる。

同じ年の1911(明治44)年、『十人写生旅行』(小杉1911)と『瀬戸内海写生一週』(小杉1911)という二つの風景画集が出版される。当時の新進気鋭の画家たちが瀬戸内海を旅して、風景画と紀行文、日記などをまとめて、共著の本として出版したものである。明治時代の洋画界は当初明治美術会という美術団体が主流であったが、やがて黒田清輝らがフランスからもどり、新派の白馬会を結成すると、明治美術会は旧派として追いやられていく。1901(明治34)年、明治美術会は解散し、その中の旧派の画家たちが太平洋画会を設立、その有志が瀬戸内海写生旅行にやってきた。中村不折、^{ふせつ}鹿子木孟郎、^{かのこぎたけしろう}吉田博、中川八郎、小杉未醒、^{みせい}石井柏亭^{はくてい}といった、まだ20歳代から40歳代の画家たちであった。なぜ、1911(明治44)年に瀬戸内海にやってきたのだろうか。小豆島の神懸山保勝会が招いたということもあり、大阪商船会社の援助もあったろうと推測されるが、それ以上に、彼らは瀬戸内海を描きたかったのであろう。

この若き画家たちは、1892(明治25)年に日本にやってきたアルフレッド・パーソンズというイギリスの水彩画家の影響を強く受けた人たちであった。日本では広重の名所図会のような名所絵が流布している時代に、パーソンズは水彩画でリアルに淡路島や神戸の普通の自然風景を描き、来日中に東京美術学校で個展を開く。1896(明治29)年、この日本滞在記を『日本印象記』(Parsons1896)として出版し、風景の挿図を多数載せる(図9)。若き画家の卵たちが彼の個展を見て、特別の名所ではなく、普通の風景が絵になるのかと驚愕する。しかも、水彩の写実画で美しく描かれていることに感銘をうける。この時代、特別の〈名所の瀬戸内海〉ではなくて、普通の〈風景の瀬戸内海〉が見いだされていくのである。

この写生旅行に参加した大下藤次郎という風景画家は、旧来の名所ではなく、名もない普通の岬や海岸の風景を描いている(図10)。普通の海洋に美を見いだしていった。この大下は瀬戸内海旅行に先立つ1907(明治40)年頃に上高地、尾瀬、十和田湖などの奥山の自然風景を追いもとめ、その風景画を雑誌『みづゑ』で広く普及していた。上高地、尾瀬、十和田湖などは我が国を代表する原生的景観として、のちに国立公園の核心部になっていく所である。国立公園とは風景を切りとり、その風景を国家がオーソライズするものであるが、日本の国立公園の模範になった風景は、アルプスやロッキー山脈のような山岳景観が中心であった。大下もまたこの新しい原生的景観を見つめる同じまなざしで、瀬戸内海を捉えようとしていた。



図9 『日本印象記』舞子から見る淡路島



図10 『十人写生旅行』内の海弁天島

5. 瀬戸内海国立公園の誕生

日本の国立公園を生みだした中心人物は林学博士の田村剛である。瀬戸内海沿岸の倉敷に生まれ、東京帝国大学を出て、内務省で国立公園を指定する仕事に従事する。アメリカ、ヨーロッパに留学して、国立公園を調査するが、アメリカ型の营造物国立公園は日本に合わないと考え、イタリア型などに倣って独特の地域制国立公園を誕生させる。田村は、台湾の調査を終えて下関に帰港しようとしたとき、船の衝突事故に遭い片足を切断する。38歳の働き盛りであった。昭和の初め、彼が足を切断した直後から、国立公園の選定作業がはじまる。彼は籠に乗って現地調査を行い、全国に国立公園を生みだしていく(図11)。

国立公園は1932(昭和7)年に12カ所が内定していた。富士山はもちろんこの12カ所に入っていた。しかし、富士山は、山麓の陸軍の演習場をどうするか調整がつかず、結局、陸軍に譲歩して、演習場は国立公園に編入せず、不自然な線引きで1936(昭和12)年に国立公園に指定される。瀬戸内海、雲仙、霧島は区域を限定していたこともあり大きな問題を抱えず、幸運にも、1934(昭和9)年、我が国最初の国立公園となる。瀬戸内海は展望地から見る多島海の島々が国立公園として指定される(図12)。



図11 籠に乗る田村剛



図12 1934年瀬戸内海国立公園指定区域

瀬戸内海は世界的名声を得ていたもので、海洋景観ではあったが、当初から国立公園候補地になっていた。国立公園が誕生した1930年代の瀬戸内海の写真をしてみると、島々の港は活気にあふれ、島々の隅々まできれいに耕され、手入れがいぎとどいた段々畑や傾斜畑の風景が広がっている。瀬戸内海の島々は1960年代の高度経済成長期までそのような風景だった。しかし、その後は、過疎化、高齢化で、島も疲弊して、手入れがいぎとどいた風景が失われてきた。

瀬戸内海国立公園が誕生したころ、鳥瞰図・パノラマ絵図で瀬戸内海の観光を推進した人物がいた。吉田初三郎という絵師である。彼は先に述べた太平洋画会の洋画家鹿子木孟郎の門下に入るが、鹿子木から、君は洋画の道に進むよりは広告の道に進む方が良いと言われ、洋画家を断念する。結果的には、鳥瞰図の分野で初三郎独特の絵画世界を築く。この時代、瀬戸内海を航行していた大阪商船が初三郎に航路図、ガイドマップの制作を依頼する。瀬戸内海は初三郎の世界として普及していく（図13, 14）。一種独特の不思議な世界であり、テーマパークのような少し現実とは離れた、幻想的で均一的な独特の世界を連想させる。この初三郎ワールドが瀬戸内海の船による観光を推進していった。この鳥瞰図は、地形をデフォルメし、場合によっては広域のすべてをおさめるように描いている。瀬戸内海を中心に、上の方には日本海を描き、下の方には四国までを描いている。真実らしく見えながら、デフォルメして、全体の地理をわかりやすく図示しているところが初三郎の真骨頂である。

鳥瞰図とは上空から俯瞰した図であるが、この上空から眺める視角によって、瀬戸内海の〈多島海〉という風景がビジュアルな形で広まっていったのであろう。上空から見てこそ、無数の島々が見えてくる。昭和の初めに、一方で多島海を価値付ける国立公園が誕生し、一方で多島海を視覚化する鳥瞰図が普及し、瀬戸内海観光が推進された。

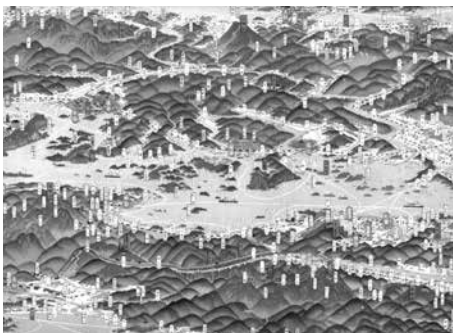


図13 日本鳥瞰中国四国大図絵



図14 世界之公園瀬戸内海御案内

6. 自然史の風景から人類史の風景へ

瀬戸内海の景観の特質は、自然景観から人文景観まで多様に存在し、しかも、庭園のように繊細に共存していることにある。穏やかな内海と島々が浮かぶ多島海、島と島の間には瀬戸（海峡）があり、潮が流れている。港町、集落、造船所、柑橘や花卉の農業、帆掛け船の漁業など、人々の様々な営みがあり、多彩な人文景観が広がっている。また、吊り橋や斜張橋の橋梁景観、美しい夜景を見せる工場の産業景観、レトロな建物や斬新な建物が並ぶウォーターフロント景観などの現代的な風景もある。自然景観から人文景観まで、繊細に共存する景観多様性を現出するのが瀬戸内海であろう。

今、自然風景の評価は、自然史の風景から人類史の風景へと移行しつつある。自然史の風景とは生態学などの自然の尺度で評価した自然風景である。原生林などの自然度の高い原生景観はその典型であり、現在の世界自然遺産もこの見方に貫かれている。20世紀は原生林、源流、高山などの人間の手の入っていない自然の評価に向かった。ウィルダネスと呼ばれる原生自然や完璧な生態系が絶対的な基準であった。しかし今、里山、里海、干潟、用水路、ため池、棚田などが評価されはじめてるように、人間との関わりで自然風景が評価されはじめている。このような風景を自然史の風景に対し、人類史の風景と呼ぶことができる。今、世界遺産や文化財のなかにおいても、農業景観や生業景観を評価する文化的景観という概念が普及してきているが、これも人類史の風景への動きにほかならない。瀬戸内海は、自然、歴史、文化が多様に重層している。風土との連続性や過去との連続性が残された持続的風景を維持してきた。近代文明は壮大な都市文明や物質文明を築き、風土との連続性や過去との連続性を断ち切ってきた。瀬戸内海の持続的風景は近代文明を見直す風景でもある。自然史の風景から人類史の風景へと移行し、近代文明が見直されていくなかで、瀬戸内海の風景もまた再評価されていくであろう。

参考文献

- 小西和（1973）『瀬戸内海論』名著出版
小杉未醒編纂（1911）『十人写生旅行』興文社
小杉未醒他（1911）『瀬戸内海写生一週』興文社
久米邦武 田中彰校注（1985）『特命全権大使米欧回覧実記』岩波書店
Parsons, Alfred William 1896 NOTES IN JAPAN, Osgood, Mcilvaine & Co., London
リヒトホーフエン、フェルディナント 海老原正雄訳（1943）『支那旅行日記』慶応書房
斉藤信（1967）『江戸参府紀行』平凡社
柳田国男校訂（1930）『紀行文集』博文館

講演

2010年4月17日ものがたり観光シンポジウム
「フジヤマから瀬戸内へ」記念講演

瀬戸内を旅すれば

神崎宣武*

From Fujiyama to the Seto Inland Sea, Symposium for Narrative Tourism (Apr. 17, 2010)
Commemorative Lecture: "If Traveling the Seto Inland Sea"

KANZAKI Noritake

1. 瀬戸内海の呼び方今昔

はじめに瀬戸内海について言葉の説明をさせていただきます。西田先生がご本に書いておられますが、「瀬戸内海」という言葉は明治以降に地理用語として使われるようになったものであって、明治以前には瀬戸内海という言い方はありませんでした。明治以降、播磨灘や周防灘といった様々の「灘」、流れの速いところを指す「瀬戸」、それらの集合体を指して「瀬戸内海」と呼ぶようになります。

しかし、曖昧ではありますが、江戸時代には現在の瀬戸内海を指す言葉として、「せとうち」（瀬戸内）という言い方と「うちうみ」（内海）という言い方がありました。はっきりと線を引くことはできないので大まかに申しますと、西の方、つまり広島県、山口県、愛媛県、そのあたりの海には「せとうち」という表現をよく使っており、これに対して岡山県、兵庫県、香川県、こちら側の海には「うちうみ」という表現を多く使っている傾向があります。「うちうみ」は申すまでもなく外洋に対する言葉ですから、紀伊水道を通過して太平洋に通じるというような意味を含みます。「せとうち」と「うちうみ」は、はっきり2分されているわけではありませんが、江戸時代には概して、西の方が「せとうち」、東の方が「うちうみ」というような使い分けがなされていたことを確認しておきましょう。

私は宮本常一先生に長く師事しておりましたが、宮本先生も著書の中ではだいたいそのように使い分けをしておられるように思います。この使い分けは、江戸時代の紀行文をひも解くことでも見当付けることができます。

2. 江戸時代の紀行文

江戸時代にはかなりの紀行文が書かれていますが、従来は歴史の資料としてはあまり重

*旅の文化研究所

要視されませんでした。しかし、土地土地の風土や風物、人情などについてはそれに頼らざるを得ない描写がたくさんあり、最近では紀行文を見直す風潮が学問の世界にあります。ただし、瀬戸内海に関する紀行文は数としてはあまり多くはありません。その中の一つに幕末の志士としてよく語られる清河八郎の紀行文があります。彼は越後の人ですが、お母さんを連れて伊勢参宮をし、大坂を經由して金刀比羅さんへ参って長崎方面に行き、帰ってくるという旅をして『西遊草』という紀行文を書いております。大坂からは瀬戸内を巡る旅です。それから意外と知られていないのが、長崎のオランダ商館に勤めていた文官たちが商館長の江戸参府に随行して、上り下りの「せとうち」の旅と「うちうみ」の旅を書いています。ケンペルトとかスンプル、シーボルトといった人たちの紀行文です。

3. 商人が書いた『筑紫紀行』

(1) 菱屋平八の瀬戸内の旅

このような瀬戸内海の紀行文のうち、今日は菱屋平八という名古屋の商人が書いた『筑紫紀行』を紹介します。この紀行文をなぜ取り上げるかと言いますと、武家や文人などの体制側にいる人は文章は要領はよろしいが建前的な記述が多くあります。下々の暮らしの視点から見た記述というのは案外少ないのです。菱屋平八という人は、『筑紫紀行』を享和2年(1802年)に著しています。平八は家督を息子に譲って旅に出ます。当時は40歳代で隠居するということが珍しくありません。それが一般的でした。40歳代は元気な限りはまだ盛りですから、隠居後に旅に出ることも一つの流行でした。平八は大坂へ出て瀬戸内を下り、九州を目指します。西の方への旅は金刀比羅とか厳島とか、目指すところは色々ありますが、江戸の後期になるとだいたい長崎を目指すと考えてよいと思います。長い道中です。平八の場合は4ヶ月ぐらいをかけての道中になりますが、4月12日に大坂から船に乗ります。

(2) 乗合船と立船

大坂にはたくさんの船がありましたが、どの船を選ぶかはその人の判断です。大きく分けて二通りの船があります。一つは「乗合船」で、あとの一つは「立船」(たちぶね、たてぶね)です。特別仕立て、チャーター船ということです。先に紹介しました清河八郎は、お母さんとの二人旅で、厳密にはこれに従者として荷物かきの男衆が3人付いていました。大坂の船宿に泊まりますが、船宿の主人が、ほかの人に煩わされずに瀬戸内の旅を楽しむことができるようにと立船を斡旋してくれます。この立船は、船頭2人の40石船です。40石船は大きな船ではありません。北前船も千石船といますけれども、これは正味の千石ではなく、ほとんどが700石か800石です。外洋船はそれぐらいの規模ですが、内海を客を乗せて走る船は40石ぐらいの船が走っていたと想定できます。40石というのは、

だいたい全長5間ぐらい、幅が2間ぐらいまでですから、現在の小型漁船と変わらないぐらいの大きさです。帆を立てます。ただし、接岸するときや風が凧いだときには櫓が必要ですから櫓も付いています。瀬戸内海の船は帆が1本です。補助の帆がありますが、1本の帆柱に長方形の木綿布の帆を付けますから、この帆は風向きに合わせるような操作ができません。2枚帆、3枚帆になりますと逆風でも帆を回したり掲げることによって進むことができますが、内海の船は1本帆^{おいて}で、追手を受けて進むので、船旅の前提に当然風待ちということがありました。したがって、予定がなかなか組めないというのが江戸時代の船の旅ですが、そのときに他人と一緒にでは何かと不自由であろうということで清河八郎の場合は、立船をチャーターして船旅を楽しんでいます。

ところが、菱屋兵八は乗合船に乗ります。これも大坂港でいくつかの船と交渉して乗るわけですが、結果的には出港の前に相乗りの客が降りてしまい、平八は荷物かきの従者と2人で乗り、船頭は3人です。乗っている人より船頭が多いという船でありました。日記にはこう書いてあります。

「讃岐の国丸亀というところの船にて、これよりこの大坂に渡る人を乗せてきたりて、またここよりかしこに渡る人を乗せて行く、年中かようにしてのみにして、行き通うなり」

丸亀と大坂を人がいれば行き来するという船で、年中そういうふうに専業状態にあったと書いてあります。

平八が乗った乗合船の値段はいくらかと言いますと、「右の船丸亀まで一人分めし料ともに銀二十五匁なり」と書いてあります。つまり食事付きで銀25匁。これは60匁をもって1両と計算するのが妥当でありましようから、1両の半分弱。1両を10万円としますと、4万5千円ほどになります。これで大坂から丸亀まで順風であれば4日から5日で行きます。平八も4日半ほどで行っていますので、1日当たり1万円ぐらいです。現在のお金に換算しても物価が全然違いますし、銀と金の値段も違いますので意味がないのですが、それぐらいに換算しても不自然な値段ではないと思います。

ちなみに清河八郎の場合は立船ですが、40石船のチャーター船で瀬戸内を下りまして、岩国の先、上関の室積を回って帰ってくる。実際は大坂に帰るわけではなくて姫路の沖の室^{むろのつ}津に着くのですが、そのルートで8泊9日ですから平八の丸亀に行く船の倍の日数で1両3分です。1両3分というのは、銀25匁で、平八の約3倍の約13万円相当のお金ですが、チャーター船なら妥当であろうと思われれます。

(3) 平八の旅・大坂から室津へ

さて、平八は大坂から乗合船で出港します。河口まで下りまして、河口でしばらく泊ま

ります。なぜ泊まるのかと船頭に問うてみますと、風を待たなければならないということです。平八は名古屋の人であり、船に初めて乗ったということで風を待たないと出港できないとは思ってもみなかったのです。それで、夜明け4時になってやっと風が出たということで船頭たちがあわてて船を出すという記述がありますから、夜明けであろうが夜中であろうが風次第で船は出たり泊まったりするということです。それから大坂をあとにして、六甲の山地を見ながら下ります。

「大坂のかなたは隔たって霞みて見えず、されども東の方よりいきつつも六甲山、摩耶山、丹生の山などという山々が見える。それから須磨の海岸も見える。眺望は景勝言語に絶する」

という記述がありまして、これは見晴らしが良く海岸線が美しいということですが、この「眺望言語に絶する」という言葉は、必ずしも美しい景色であると受け取らない方がよいと思います。江戸時代の紀行文は、だいたいところで「眺望言語に絶する」と書いていますが、これは文章上の弁法というものであって、これをもって最上の景色だと決定づけることはできません。

船は明石に下ります。明石で泊まってしばらく風待ちをし、さらに室津^{むろつ}へと下ります。室津は現在のたつの市にあって「室のみなと」とも言われていました。当時の播磨路で一番大きな港町であり、約1千軒の家並みがありました。参勤交代の西国大名のうち約半分が室津に上がります。西国というのは狭義には九州を指しますが、広義には中国、四国を含めてこれより西の大名たちであります。これらの大名の参勤交代のうち20藩ほどが室津に上がります。中には鞆の浦（広島県）や牛窓（岡山県）に上がる大名もありますが、20というと西国大名の約半分ということになります。ただし、参勤交代は隔年なので交代に行かない大名もいますので、ほとんどの大名が室津へ船を入れていたということになります。室津ではただ停泊するということだけではありません。西の方から上ってきて、室津から今度は陸路をとることになります。なぜかと言いますと、「うちうみ」と呼ばれた大阪湾の近辺は船が多い。例えば、阿波の徳島でつくられた藍玉を大坂の間屋へ運ぶ。伊予の緋木綿を大坂の間屋へ運ぶ。というようなことで、商業廻船が頻繁に通っている、いわばラッシュ状態の内海でありました。加えて、島津藩のように20隻以上の規模で大名船が入ってくると、一時的に航行を妨げることになります。大名船が停泊している間は、一般の船は大名船の周り一定距離には近付くことはできません。このようなことで、大名行列は室津に上がるというのが慣例でした。室津にはほとんどの西国大名が上がるということで、本陣が5つありました。宿場や港で本陣が5つもあるのは全国でも室津だけでしたから、それぐらい栄えた港町であつたとお考えください。

その室津の港で風待ちをするために平八の船は止まり、平八たちは船から上ります。風

待ちというのは追手が吹くまで待つということであって、必ずしも暴風雨のようなことではありませので、まちを歩くのには差しさわりのない気候もあるわけです。それで、平八たちは室津を歩いて夜、船に帰ることになります。なぜ帰るかと言いますと船が出港するかもしれないし、また、船は賄い付きですから食事を断っていない限りは船で夕食を取りに帰らないといけない。このようなことで、室津で船から下りてまちを歩きます。歩いている途中の記述が実に面白い。例えばこういう記述があります。

「かくて、申の刻より雨降りて濡れる。よって今宵はこの港に泊まるということが決まった。町家では家々に居風呂を立てており、停泊した船の旅人に風呂を提供する」

船の中では賄いは受けても風呂が使えないということで、風待ちの港では風呂を提供する仕事が発達していました。平八たちは風呂に入って船に戻りますが、今日は出港しないということになります。船は、賄い付きとは言いましても十分に楽しめるわけではありません。平八と従者と船頭の3人でどうしようかと相談しているところに、もう一人の若い船頭がきまして、室津の遊女町を案内しましょうということになり、茶屋に行って酒とともに食事をとるとい記述があります。

「酒をつけて飲み交わす。肴は精進にあつらえたるに、ゆえにはあれども特に簡素にてまことにそぐといいつべし。主の妻、酒を勧めるありさま、いとふつつかにして、冷々静々としてしみじみものをも言わず」

客慣れたありきたりの接待が描かれています。しかしその後、遊女が出てきます。遊女が出てくると、なぜか筆が進みます。ここは時間の関係で割愛しますが、平八の日記が優れているのは、遊女の記述の素直なところです。

「かかることを日記に書き入れることが例もあらじなれども、珍しかりしことのさまをも仔細に著しおきたく、かつまた文章を飾りて事実を膨らましたがることは余が本意ではないから書く」

ということで、細かく記述しています。これが、お役人や武家の紀行文とは違うところです。

実はこのような室津のまちの様子は、ケンペルも『江戸参府紀行』の中に書いています。ケンペルの参府は元禄4年、5年（1691年、1692年）ですから、平八の船旅より120年ばかり前の話ではありますが、室津の状況はほとんど平八の記述と変わりません。

室津のまちは、当時の日本でも特に活気を帯びていました。千軒の港町で本陣が5つもあるような港町で、接客業が盛んで遊女町が形成されておりました。しかし、今は見る影もありません。軒が落ちているような家もずいぶんあります。私は40年ぐらい前から2、3回行っていますが、10年ごとに大きく変わっています。国では保存すべき伝統建築群というものを推奨していきまして、そういうものの再生活動に補助金が出ています。それに室津が取り上げられないのが、私には不思議でなりません。江戸時代の陸上海上を含めての交通の要所として栄えたまちが、今や見る影もないほどにずたずたに崩れていることは、日本の文化遺産を考えるにおいて、残念でなりません。遊女町があったからということでないがしろにされているということではないでしょうが、また国とすれば地元が推さないからということであるかもしれないかもしれませんが、それだけではないように思えます。海から見る視点が、我々をして稀薄になったからだと思います。海から見れば、当然そういう変遷は一目見えるはずですが、あるいは、空から見ても一目瞭然に見えるはずですが、そういう視点を現代人の私たちはおろそかにしたということをおぼろげに反省したいと思います。今や、室津、室の港に打つ手はないかも知れませんが、そういうことを考える余地があるということをおぼろげに申し上げておきたいと思えます。

(4) 平八の旅・室津から丸亀、周防へ

さて、室津から今度は風待ちをして西へ下ります。つぎの日の朝、追手が吹いて参りますので、一気に丸亀まで走ります。一気にと言いましても、家島群島、小豆島、児島湾、屋島を見て丸亀に入るわけですが、風の具合が良ければほぼ一日でそれだけ走ります。距離にすると100kmぐらいでしょうか。陸路を1日100km歩けといっても歩けるものではありませんが、船ですと風の状態さえよければ1日で行けるということで、船旅はやはり便利であることには相違ないわけです。

それから、平八は丸亀へ上がって、丸亀の船主である大黒屋清兵衛のところ逗留します。大黒屋といいますのは、当時のお金持ちの間屋さんの代名詞みたいなものでした。それから金刀比羅さんを回って、4日後に船を仕立て直して、今度は上関の室積（山口県）まで参ります。ですから、平八の瀬戸内の旅は17日間でありまして、その様子が『筑紫日記』に克明に書かかれています。その結論としてどのように書かれているかと言いますと、これほど楽しかった旅はない、ということでした。風待ちの退屈さは、酒と肴が補ってくれる。行く先々は沿岸か島ですから、魚があります。いい魚をあてに酒を飲む。船頭たちも十分にもてなしてくれて、まちの案内などもしてくれる。港、港にそれなりの料理屋もあり遊郭もある。そういうことで、まだ帰路の旅があるのですが、生涯でこれほど楽しい旅はなかった、ということを書いているのです。

そして、平八は丸亀から周防の上関までもう一再度船を仕立て直しますが、船代は合

計で1両4分。清河八郎のチャーター船での1両3分と変わらないぐらいのお金がかかっているわけです。当時、長屋住まいではなくて家を持って親子5人ぐらいで暮らしても1年10両あれば十分という時代ですから、その10分の1ぐらいを10日間ちょっとの船旅に費やし、それでも惜しくなかったと書いています。うまい魚を食って酒を飲む。それから、行く先々のことは船頭が克明に教えてくれる。つまりこれはガイドとの相性になりますが、平八は、船頭の手引きが誠に手際が良かったし、説明が適当であったというようなことも書いており、船旅をたいへん褒めているのです。

(5) 船旅は江戸時代の旅の追体験

改めて考えて見ますと、今は時代が違いますので江戸時代と比べる訳にはいきませんが、江戸の旅を追体験するならば現代の船旅ではなかろうか、と思います。中でも瀬戸内の船旅だろう、と思います。船の甲板から見る陸との距離は当時とほとんど変わらないわけです。山も動いてないし島も動いていない。そうすると、「絶景は筆舌に語り難し」という風情は今も昔も変わらない。この「風景を良く見る」という旅が現代の私たちにどれぐらい伝わっているのでしょうか。

それは、瀬戸内の写真集をご覧になれば良くわかります。瀬戸内の写真は、ほとんど日暮れ時を撮っています。もちろん昼間も撮っていますが、日暮れというものがつまらない、いうならば近・現代の風景を消してくれます。また、西日というのは朝日より長くあたりますから、海面が神秘的に映えるというようなこともあって、写真家は西日の時間帯を選んで撮っているのだらうと思います。しかし一般に、私たちは、そのような時間を旅をすることがあまりにも少ない。それから、近代交通がスピードアップしておりますから、そういう余裕もなくなってしまっている。良い景色を見ても一瞬に過ぎ去ってしまうというようなことですので、江戸の追体験というのは陸路ではむつかしく、船旅でかろうじて叶うように私は思います。

(6) おわりに

私は、昭和42年、43年（1967年、68年）に横浜からフランス郵船に乗ってインドへ旅をしました。インドからさらに陸路を北上してヒマラヤ山地へ行ったのですが、往復を船に乗りました。飛行機代がなかったからです。当時は、フランスのマルセイユに行く船がありました。行きは大阪港を素通りし、帰りは大阪港に寄りました。現在のような埋立地がなくて、帰りは天保山の第一埠頭に入ったのを覚えています。そういう船の旅をしますと、昔と今はほとんど変わらないということが分ります。船というのは、江戸時代は風待ちという計算できない停泊の日が出ますが、現在でも荷物の上げ下ろしということで港に泊らなければならない。つまり長距離航路というのは、客船で成り立っているのでは

なくて、貨客船で成り立っている訳ですから、定期的に港に泊らなくてはならない。途中の港で1日か2日停泊することになるので、陸に上がって見物をする、遊ぶ。私なんかはお金がありませんでしたから、夜は船に帰れば、ビーフシチューのできそこないのようなものと安ワインは口に入るというようなことでした。時代の変化が旅の本質へあまり関係しないということを体験し、私は船旅を見直したものでした。

ただし空路が発達した現在は、そういう状況を設定するという事は難しくなっています。一方、クルージングというのが各地ではやっています。このクルージングを批判するつもりはないのですが、なぜあれほどまでに船内での行事を詰め込まなければいけないのかと思います。カルチャー講座とか芸能ショーとか時間帯を細かく切り、これでもかこれでもかとメニューを与えられて、景色を見ている余裕がないという残念な結果を生んでいるように思います。

もう一つついでに申しますが、今は良い紀行文がない時代です。紀行文学賞を設定しても、該当者なしということが出てきます。良い紀行文は、自分の足で歩いて、自分の目で見て、自分の耳で音を聞いてという一次体験が大事になります。それをはしょって時間内にたくさんの要素をつなぐという旅が、これは近代から現代の流れとして発達したように思います。今一度、緩やかな船旅というものを大事に江戸返りしてもいいのではないのでしょうか。ご批判はあろうと思いますが、時間が来ましたのでこれで納めさせていただきます。ありがとうございました。

「ものがたり観光の時代」を考え、
行動するシンポジウムです。

シンポジウム 参加申し込み方法

- 参加希望者は必ず往復八ガ方でお申し込みください。参加資格は観光学習に興味ある概ね高校生以上の方とします。
- 参加証を返送しますので返信用八ガ方にも「自宅住所の記入」をお願いします。
- 参加者1名ごとに、1枚の参加証が必要です。
- シンポジウム参加費は無料です(ただし船内見学時の昼食は各自負担)。
- 下記参加パターンA班、B班、C班のいずれかを必ず明記してください。4/7消印有効。先着400名で締め切ります。
- 申込先: 〒530-0047 大阪市北区西大薨6-5-17 デジタルイイトビル5F
ものがたり観光行動学会「4/17シンポジウム」係まで。
必ず住所・氏名・年齢・電話番号を明記してください。
- 問い合わせ先: ものがたり観光行動学会

☎06-6311-3325



シンポジウムプログラム

事前の案内10分

「13時半〜16時50分」開場13時

記念講演

瀬戸内を旅すれば
旅の文化研究所 所長 神崎宣武

基調講演

瀬戸内海の物語
奈良県立大学 地域創造学部 教授 西田正憲

問題提起

観光政策の陰影
関西学院大学 副学長・教授
ものがたり観光行動学会 副会長 加藤晃規

休憩5分

事前の案内5分

ディスカッションステージ 80分

(右記までの登壇者を含む)

瀬戸内は幻か

コーディネーター

佛教大学 社会学部 教授
ものがたり観光行動学会 副会長 高田公理

パネリスト

国際日本文化研究センター 教授
ものがたり観光行動学会 会長 白幡洋三郎
日本コナモン協会 会長 食文化研究家
ものがたり観光行動学会 理事 熊谷真菜
国土交通省 海事局 次長 大黒伊勢夫

提言10分

瀬戸内のススメ

白幡洋三郎

終演案内5分

フロア司会 フリーアナウンサー

大阪千代田短期大学 非常勤講師 水村真弓

全体進行

大阪千代田短期大学 物語観光情報研究センター 所長
ものがたり観光行動学会 専務理事 李 有師



ものがたり観光シンポジウム

フジヤマ から瀬戸内へ

近代以前に「瀬戸内海」は「存在しなかった」。それは播磨灘や燧灘など、せまい海域の寄せ集めに過ぎなかった。それが近代に「ひとつつながりの内海の多島海＝瀬戸内海」として「発見」される（西田正憲『瀬戸内海の発見』中公新書、1999）。

そこを1860年に訪れたドイツの地理学者フェルディナンド・フォン・リヒトホルフェンは、その著に、こう記した。「広い区域に互る優美な景色で、これ以上のものは世界の何処にもないであろう。将来この地方は、世界で最も魅力のある場所の一つとして高い評判をかく得。沢山の人々を引き寄せることであろう。……かくも長いあいだ保たれて来たこの状態が今後も長く続くか、事を私は祈る」

日時

4月17日
[土]

「13時半～16時50分」開場13時

■別途に船内見学を希望される方は左記の案内に従ってください。

会場

WTCホール

地下鉄「トレードセンター前」駅徒歩5分

- 主催/ものがたり観光行動学会
- 後援/大阪市
- 協力/商船三井（ポスター原画提供）

トラベルニュース社、NPO法人もつひとつの旅クラブ
NPO法人DREAM ISLAND（小豆島）
井上誠耕園（小豆島）、フェリーさんぽらわあ
シンカ・コミュニケーションズ、大阪千代田短期大学

集合時間と船内見学

プログラム

A班 11時集合 B班 11時半集合

それぞれの指定時刻までに南港ポートタウン線「トレードセンター前」駅下車すぐの「フェリーさんぽらわあ待合室」集合。船内レストランにて昼食後（各自負担900円）約25分間の操舵室・特別客室などを巡る船内見学会に出発。その後、各自にてシンポジウム会場に集合する。WTCホールまで徒歩8分。

C班 船内見学しない

シンポジウム開演時刻13時半迄に会場・WTCホールに集合。

「ただいま」と言える温泉地

奥坊 一広

女子サッカーW杯で、なでしこジャパンが優勝した。同点ゴールを決めた宮間あい選手が岡山県美作市の湯郷ベル所属であったことから優勝インタビューで「今、何をしたいか」と聞かれ「湯郷温泉に入りたい」と発言。そのほかのインタビューでも、ことあるごとに「湯郷温泉」を連発し、一躍全国に名前が広まった。

とはいえ筆者自身、湯郷温泉にはまったく興味がなく、行きたいとも思わなかった。大阪から1時間に1本の間隔でバスが走り、車で行っても2時間で着くという至近距離にあるにもかかわらず「湯郷に行くのなら遠くても違う温泉地に行こう」と思っていた。5、6年前までは。

かつて湯郷温泉は関西の奥座敷として宴会やゴルフをセットにした団体型の温泉地で人気を誇っていた。しかしゴルフもせず宴会をしに行くような組織にも属していなかった筆者にとっては、無縁の温泉地だった。必然的に足も運ばない。ところがここ数年、何回行ったかわからないほど湯郷温泉を訪れるようになったのは、湯郷温泉の旅館の若主人、女将さんら、そして観光協会の事務局長と、あるご縁で親しくなったからである。一転して湯郷温泉は身近な温泉地になった。

これまで見向きもしなかったくせに、人と親しくなったから急に身近な温泉になったというのは「なんと単純な」と思われるかもしれないが、人の気分なんてそんなものである。特に好き嫌いに関しては。ちょうど同時期に温泉街の道路整備が始まり、湯郷温泉自体も団体中心から個人型に転換しようと試みてい

る時期と重なったことも頻繁に訪れるような要因のひとつではあるにしても。

まったく統一性のない旅館がバラバラに建ち並ぶ湯郷温泉。それを「おもちゃ箱をひっくり返したような温泉地」として温泉地の人たちが言い出したら、偶然にもおもちゃの収集家から数万点にも及ぶおもちゃの寄付があり、「おもちゃ箱をひっくり返したような温泉地なんだから、おもちゃにこだわった温泉地に」と、おもちゃの博物館までつくって今年、「おもちゃのまち宣言」までしてしまった。

でも正直なところ、こういったおもちゃがらみの取り組みもおもしろいとは思うものの湯郷温泉の人たちとの交流がなければ、好意的に思えたかどうか疑問である。それだけ人の顔が見える温泉地、誰か親しい人がいる観光地は「ひいき」にしてしまうものだ。

名を馳せたすばらしい温泉地、観光地は一度ぐらい行くかもしれない。しかし何らかの形で人とのかわりがないと二度、三度とは行かない。人とのふれあいがいいところへ行ったら何が楽しいものか。7、8年前に知人と沖縄の宮古島へ行ったとき、ある観光施設にいと関西弁を喋る若い女性客が「ただいま」と言って入ってくる。施設の人に「関西の住み込みの人？」って聞くと、観光客で、それも年に何回も来るのだという。「ただいま」と言って何度も訪れる観光地や温泉地を観光客は求めているのだと思うが、意外と受け入れ側は気づいていない。まちがいなく筆者にとって湯郷温泉は「ただいま」と言って訪れることのできる温泉地のひとつである。

高齢社会と観光

～旅は元気で長生きするための特効薬～

井村日登美

なんだか介護ビデオのようなテーマであるが、高齢社会に突入した我が国において「若い」の問題は避けては通れない。今の調子で高齢者が増え続けると2013年には総人口の約25%を65歳以上が占めるという（平成21年度版の高齢社会白書）。いよいよ若者4人で1人の高齢者を支えるという状況になってきた。なかなか実感がわかないが、少し注意して周辺を見回すと、確かに高齢者の姿が目立つ。昨今は歩行補助車や車椅子の利用も増えているように思う。

平均寿命が伸び、女性が86歳、男性80歳（平成22年）と世界でも長寿の国の日本。現役を引退してからの人生が長い。寿命が伸びた分を「神様からの贈り物」ととらえ、大切にしなければならぬという考え方がある。同感である。ただ「元気で」という条件下でのことだ。

世は健康ブームで健康をキーワードにした商品は山のように世に出ている。酢、ゴマ、ロイヤルゼリー、ゴーヤ、ウコン、青汁など枚挙にいとまがない。また趣味やスポーツ、ボランティア活動など社会貢献活動も必要である。そして、もう1つ挙げておきたいのが「旅」である。そう非日常の空間と時間に身を置き、心身に刺激を与えてくれる。この刺激こそが旅の秘薬といえよう。

旅好きな高齢者は多い。比較的手軽に利用できるバス旅行や温泉旅館に1泊旅行へ頻繁に行く。国内のみならず海外も行き。クルーズだって高齢者のリピーターが目立つ。いずれも元気でハツラツとしている。ハツラツとした人が旅に出るのか、旅に出るからハツラツとするのか、わからないが、どこかで旅

が元気の源になっていることは間違いない。

そして旅の本領は、次の段階で発揮される。次の段階とは、手が必要な高齢者である。

私ごとで申し訳ないが、今年90歳になる母親がいる。一昨年に台湾、昨年はハワイへと旅をした。荷物のほかに車椅子に歩行補助車を持参しての大旅行である。空港では行きも帰りも車椅子のサービスをお願いし、機内の席もトイレの近くにアサインしてもらった。台湾ではツアコンのおじさんに「よくぞ連れて来られた!」と絶賛され、ハワイではホテルの人に「ナインティ?すごい!」と驚かれ、「ママさん、ママさん」といって親切にしてもらった。本人も周囲みんながかまってくれるので大満足。旅をどこまで記憶しているのか、わからないが、何年たっても「あの時は……」と楽しんでいる。

この話を友人、知人にすると、ほとんどの人が驚く。「そんな歳で外国へ?」「よく連れていったね」「元気やね」……。

そんな時かならず「行けます」「連れて行ってあげて」と答える。実際に行けるのだから、そして、行ったのだから。車椅子のサービス以外、特別なことは何もない。唯一必要だといえるのは「連れていこう」という人の強い意志だけである。

「ユニバーサルデザイン」という言葉がある。障壁を取り除くという意味のバリアフリーとは違い、最初から高齢者や身体障がい者、外国人など誰でも使用できるデザインになっているという意味だ。それはハードだけではなくソフト、心の問題も含めてのことである。それは先入観や固定観念で最初から無理だと思いついていないか、ということである。

高齢者は確実に増えていく。元気で長生きし、人生を楽しむために「旅」を特効薬として巧く使おうではないか。高齢者が生き生きすることは、これから迎える高齢社会を支えるために必要不可欠な条件である。そして、新たな旅の需要を生み出す可能性も秘めているのだから。



エッセイ 3

観光を表現することば

野崎 英之



タイ国政府観光庁が展開する日本語版ウェブサイトのひとつ、「テクテクタイランド」<<http://www.thailandtravel.or.jp/tektek/>>の制作に携わっている。通常の「観光スポット」を紹介するサイトとは異なり、これは制作チームが実際に現地を旅し、そのレポートを通じてタイを紹介しようという試みになっている。なかなかクライアントの理解も得づらいのだが、旅は体験であって観光スポットのスタンプラリーではない。それらは実際のところ、わざわざ出かけていく口実のようなものに過ぎない。だから、サイトでは（難しいけれど）できるだけそのようなスポットとスポットの間にある「体験」の楽しみも表現したいと考えた。

たとえば犬や猫の写真を撮るのが好きな人なら、タイは良い旅行先だ。暑くてその気もなくなるのか、彼らは逃げない。それどころかカメラに向けて視線までくれたりする。ただ、

そういうことは所謂「観光情報」としては扱わず。しかし結局心に残っているのは、そのようなささやかな体験であることも多いのではないだろうか。

観光スポットを紹介する一見客観的な記述だけがすべてではない。同じものごとも、視点を変えてみれば異なる意味や価値が生まれる。昨年から非常勤講師をつとめている大阪千代田短期大学の授業では、テクテクタイランド同様、学生たちに短大のある河内長野を歩かせ、そこでの発見を紹介する文章を書いてもらっている。高校まではひとつの問いにひとつの答えを対応させる作業だが、ここでは異なる答え（＝意味・価値）を自分で生み出さなければならない。まだまだ遊び方も知らず社会経験も少ない彼らは当然のことながら「河内長野にそんなにおもしろいとこないわー」という反応だが、そのような経験や姿勢はきっと社会に出たときの糧になると考えている。

物語観光の意義と その推進方策についての考察

大黒伊勢夫*

On the Significance and Promotion of Narrative Tourism

DAIKOKU Iseo

観光分野においては、旅行形態の変化のなかで旅行ニーズが多様化、能動化し、テーマ性を持った旅行や、街歩きや体験・交流などにより地域と触れ合う旅行が求められる状況にある。地域に関わる歴史・伝記、神話・民話のみならず、地域を題材にした小説、漫画・アニメ、さらにそれらを映像化した映画やテレビドラマなど、多様なジャンルの物語が、新たな時代の観光ニーズに対応して、地域の観光の魅力を高め、その魅力を発信する力となりつつあり、こうした地域の物語に関わる観光の一端は、コンテンツツーリズムという新たなツーリズムとして捉えられている。本稿においては、筆者も参加した「観光交流促進における九州の物語の活用に関する検討委員会」（以下、「九州物語委員会」）での調査検討を踏まえ、物語観光の意義と推進方策について論ずるものである。

1. 観光を取り巻く環境の変化と観光行動の進展

観光行動は、人間が行う他の職務や生活の中で行う行動あるいは消費行動と比較しても、極めて制約の少ない自由な行動である。佐々木（2007）²は、心理学者マズローの生理的レベル、社会的レベル、自己実現のレベルという低次から高次への欲求段階説を踏まえ、観光旅行の動機を、①緊張を解消したい（緊張解消）、②楽しいことをしたい（娯楽追求）、③人間関係を深めたい（関係強化）、④知識を豊かにしたい（知識増進）、⑤自分自身を成長させたい（自己拡大）に分類したうえで、「現在は、年間2回程度、1～2泊のリラックス旅行（自然、風景等を見て、温泉で休養するなど）に行くことが多いが、将来は、訪問先の地域に独自の楽しみを求める個性的な旅行やテーマを絞った旅行が盛んになり、また学習や人間形成に結びつく観光旅行が増えていくことが期待される」としている。観光行動の進展のなかで、前田（1995）³は、従前の旅行優位型、旅行先優位型から、現代を

* 鉄道建設・運輸施設整備支援機構

目的行為優位型の時代、生活の中の観光の時代と捉え、「どこに何をしに出かけるかを多くの人が自由に選択することができる時代」としている。観光行動を取り巻く具体的な環境及び条件も変化し、

- ① 旅行者の旅行形態は、団体から個人・家族・グループへと変化し、合意形成の過程を含め旅行主体の旅行対象、目的地の選択の自由度が拡大していること、
- ② 旅行手段において、利用交通は、宿泊旅行においてもマイカー、レンタカー等が過半を占め、地方部、日帰り旅行においては、さらにそのシェアは大であり⁴、ナビゲーションシステムの普及もあって観光資源、目的地、ルート等の選択の範囲や自由度が拡大していること、同様に宿泊も、ビジネス・シティホテル等が主力となり、移動時間帯の自由度が拡大し、宿泊拠点型の活動的な旅行が容易となっていること、
- ③ インターネット、携帯電話等の情報メディアの発達により、地域や観光対象に対する詳細かつタイムリーな情報が旅行者で入手可能であり、交通機関、宿泊のみならずイベント、その他施設などの予約も容易に行えること、
- ④ 余暇、レジャーで選択肢が広がるなか、都会でスポーツクラブ、温泉施設、エステ等が普及し、リゾート地が目的地である海外旅行と競合することなどにより、国内でのリフレッシュ旅行の誘引力が相対的に小さくなっていること、

といった状況があり、国内旅行においては、個人の目的や心象による自由で能動的な旅行が選択される傾向にある。こうした時代においては、街歩きでガイドツアーが語る地域の歴史・伝記のみならず、小説、映画、テレビドラマ、漫画・アニメ、神話・神話などの多様な物語が、旅行のテーマや、地域や観光資源の魅力を高める要素となり、地域にとっては情報発信のツールとして重要な役割を果たす状況となっている。溝尾（2009）⁵などによる観光資源の分類において、物語は、人文資源の中にも含まれておらず、未だ観光資源とは捉えられてはいないが、これらの分野はスクリーンツーリズム、アニメツーリズム、さらに総合してコンテンツツーリズムとして観光分野での研究対象となっている。

2. 九州物語委員会における調査・検討

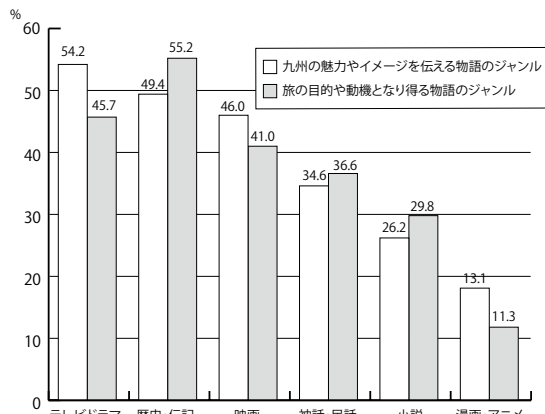
九州は、観光資源には恵まれるものの、沖縄、北海道といった地域に劣勢を強いられ、地域の断片的な情報が都会にありふれる中であって、九州の魅力やイメージが伝わりにくい。前述のような新しい旅の時代に対応した九州の魅力を探求するなかで、九州の豊かな歴史・文化やそれに育まれた物語こそが九州観光の魅力であり、それを活用すべきではないかという問題意識を地域として共有するに至った。

こうして、九州の物語を活かし、九州の魅力の発信や、新たな旅の提案、誘客や受け入れの方策などについて検討するため、田中浩二九州観光推進機構会長（当時）を委員長に、在住の作家、観光・交通業界、マスコミ、行政から委員の参加を得て、2007年7月に九

州物語委員会が設置された。

委員会では、まず、地方公共団体、観光協会、一般から地域の観光対象となる物語を募集し、約1,200もの物語が寄せられた。最も多く寄せられたのは各地の「かっぱ伝説」であったが、物語同士の重複関係や観光資源の有無などの内容を精査し、325の物語（小説66、映画・テレビドラマ58、歴史・伝記115、神話・民話30、漫画・アニメ12、詩歌・歌謡・民謡44）として物語の概要と観光資源等の観光地情報をまとめ、東京、大阪、福岡地区の一般旅行家及び旅行業従事者に対して提示し、説明会の開催やアンケートを通じて、九州への観光における物語の魅力度について調査した。その調査においては、まず、物語のジャンルに関し、九州の魅力やイメージを伝えるのに有効な物語のジャンルは何か、旅の目的や動機となる物語のジャンルは何かについて質問したが、地域の魅力を伝える手段としては、テレビドラマ、歴史・伝記、映画の順で支持率が高いのに対し、旅行行動につながる目的や動機については、歴史・伝記が第1位で、テレビドラマ、映画の順となった（図1）。個別の物語では、東京、大阪ではやはり物語の認知度が重要な要素で

図1 九州の魅力やイメージを伝える物語のジャンル



東京、大阪、福岡の各420人の居住者を性別、年代別で均等にした1,260サンプルについてのインターネットによるアンケートモニター調査の結果。
325の物語概要を基盤データとし、ジャンル及びそれぞれの物語についてアンケート。
九州物語委員会 2007.10実施。

あり、テレビドラマ、映画等による情報発信の効果が大きいことが認識された。物語の主題となりやすい歴史上の人物でみた場合、例えば、公開された伊藤伝右衛門邸や恋多き波乱の人生で福岡ではブレイクし上位を占める「柳原白蓮」は、東京ではランク上にさえ載らなかった。一方、東京では「フランシスコ・ザビエル」が第1位に上がるのに対し、福岡では第7位となっており、辻説法を行い、キリシタンが遅くまで存在した福岡ではあるが、痕跡が消され観光資源が乏しいなどの周辺情報についての格差が認められた。委員会ではこれらの結果をもとに、「魅力ある九州の物語百選」の選定を行った。選定された物

語をみると、その $\frac{2}{3}$ は九州の歴史・伝記（歴史小説を含む）の物語で、多くは、①「魏志倭人伝」「大宰府」「元寇」「朝鮮出兵」「朝鮮通信使」等古代からのアジアとの交流の歴史、②「ザビエル」「天正遣欧少年使節」に象徴される16世紀の西洋との出会いとキリスト教伝来・弾圧の歴史、③長崎出島を含め西洋技術の導入等を背景とした明治維新・産業近代化への歴史など、古代から綿々と続く九州の海外フロントとしての交流の物語に集約され、これらの物語群を中心に九州の魅力を発信すべきことが話し合われた。残り $\frac{1}{3}$ は、小説、映画、テレビドラマ、漫画アニメなどであり、「佐賀のがばいばあちゃん」「のだめカンタービレ」「黄泉がえり」など近時においてテレビドラマや映画となった作品、「花と龍」「無法松の一生」「青春の門」など幾度となく映画化されたなつかしい名作のほか、九州に在住した「夏目漱石」「森鷗外」「松本清張」などの文学者の伝記も選ばれた。

3. 観光における物語の意義と機能——コンテンツツーリズム研究についての考察——

最近においては、コンテンツツーリズムの有効性が論じられ、多様な研究成果も報告されている。また、一方、政府の政策においても、「ものづくり」から「ソフト」へのスローガンのもとコンテンツ産業の振興が謳われ、「コンテンツの創造、保護及び活用促進に関する法律」が制定された。このうち、ゲーム、漫画、アニメなどポップカルチャーに関しては、特にクールジャパンと銘打ち海外への戦略的売り込みが行われている。コンテンツツーリズムのコンテンツの範囲については確定した定義はないが、前記の法は、コンテンツを「映画、音楽、演劇、文芸、漫画、アニメーション、コンピューターゲームその他 $\cdot\cdot$ であって、人間の創造活動より生み出されるものうち、教養又は娯楽の範囲に属するものをいう」とする（第2条）。増淵（2010）⁶は、政策的検討を引用し、コンテンツツーリズムを「地域にコンテンツ（映画、アニメ、小説、音楽、テレビドラマ等）を通して醸成された地域固有の雰囲気、イメージとしての「物語性」「テーマ性」を付加し、その物語性を観光資源として活用すること」と定義し、このコンテンツの範囲は、法に定めるコンテンツと近似している。アニメ「らき☆すた」による聖地巡礼を新たな観光行動として研究する山村（2010）⁷は、コンテンツツーリズムのコンテンツについては、「その地域の付与されている物語性」と定義し、著作物たるコンテンツに限らず、ひろく歴史的な物語などを含むあらゆる物語としている。コンテンツが著作物を越えて歴史等の史実をも含むかは疑問ではあるが、九州物語委員会及び本稿の物語の範囲はこの考えに近く、物語観光を一般的なコンテンツより広く、物語全てを対象とする観光分野であるとして捉える。

九州物語委員会での物語を整理する作業などを踏まえ、物語のジャンルごとの観光分野での特性を整理すれば、以下のとおりである。

〈テレビドラマ〉テレビドラマは、直接的な旅情報を提供する旅番組以上に、人々に主人公の活躍した舞台の地域の印象を強く残す。特に大河ドラマのような歴史ドラマは、史実

に基づくが故に、地域の史跡、歴史的景観、博物・歴史館などの観光資源等を通じて地域との関連性が強く、観光振興効果が大きい。実際に「龍馬伝」が放送された2010年の高知県への県外客は、対前年38.1%増を記録した⁸。九州においては、「翔ぶが如く」、「天璋院篤姫」が同様の例である。「坂上の雲」は、松山市のまちづくりにまで連動する。

〈映画〉東京中心のテレビに比べ、「おくりびと」など地方ロケ地の魅力などを情報発信する機会が多く、道東観光に貢献した中国映画「非誠勿擾」のヒットのように海外への情報発信の可能性を持つ。フィルムコミッションを通じた地域との連携を通じて地域観光とのタイアップも可能であるが、ヒットするか否か、映像での地域の扱い方などで情報発信力が大きく左右される面がある。

〈小説〉物語の舞台として地域が描かれたり、旅の物語として綴られるものもあり、歴史小説においては、主人公の魅力を通じて史実を豊かに伝える。現代小説においては、地域出身又は在住の作家により地域が描かれる作品が多くあり、作家が捉えた地域の景観・雰囲気観が観光資源となる。小説は、長期に情報発信を継続する傾向があり、映画等映像の原作となり情報発信する場合も多いが、昨今は、活字離れの影響は否めない。

〈漫画・アニメ〉漫画は、最近では世代を超え多くの読者を有し、テレビアニメのみならず、実写映画化されるものも多い。「らき☆すた」の鷲宮のように舞台が聖地化する例もあり、「こちら葛飾区亀有公園派出所」「東京都北区赤羽」等地域名がタイトルの作品もヒットし、アニメツーリズムという分野も確立されつつあるが、熱心な層に限りがある。

〈神話・民話〉記紀に綴られた神話は、各神社の起源とも重なり地域の重要な観光資源となる。昨今のパワースポット人気にも大きく貢献する。九州は、国生み神話の宝庫であり、旅行者の期待も高い。民話は、地域のローカルな地域の歴史的雰囲気を形成するのに役立つ。「かっぱ伝説」「平家伝説」等の伝説は、地域の自然や歴史と結びついて各地の魅力的な神秘性を形成する。

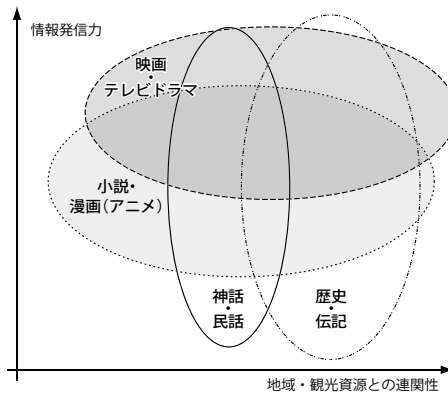
〈歴史・伝記〉物語の基礎が史実であるがゆえに物語に関わる史跡や建築物、博物館・歴史館等の観光資源が地域に多くあり、具体的な旅行行動の対象ともなりやすい。その史実は基本的に日本史又は世界史の全体の一部であり、それぞれの物語が連担する。「島津斉彬」「翔が如く」「天璋院篤姫」「集成館事業」「西南戦争」が九州の物語百選に個別の物語として選定されたが、これらは、時代を一にする重複した物語群である。長崎という地域を軸にすれば、キリスト教の布教から弾圧の時代、鎖国・出島の時代、復教・近代化の時代まで数々の物語が連担し、一つの物語のようにつながり、地域の魅力を増幅する。

以上、物語をジャンル毎に分類する場合において、同じ物語が、小説、映画、テレビドラマ等ジャンルを越え、それぞれの作品となる場合が多い。当初からメディアミックスとしてジャンルを越えたコンテンツの展開が図られる場合もある。例えば、「佐賀のがばいばあちゃん」はシリーズ460万部と書籍として大ヒットし、映画（吉行和子主演）も、

テレビドラマ（泉ピン子主演）も同時期に制作され、それぞれのロケ地である佐賀市、武雄市で観光対応がなされた。一方、「翔が如く」は、小説は維新以降の大久保利通と西郷隆盛の物語であるが、大河ドラマは幕末薩摩時代からの物語であり、作品とすれば個別である。「花と龍」に至っては6度映画化されており、個別に捉えるのは困難だ。ジャンルの違いの中で、個別の物語が相互に重複、連担して存在する。地域で捉えると、これら複数の物語を地域がメディアとなつてその魅力として重層的に情報発信することも認められる。

ジャンルを越えた物語のこうした重複を、情報発信力と地域・観光資源との連関性という座標のなかで概念的に表すと図2のとおりとなる。歴史・伝記は、地域に観光資源が多くあり、地域・観光資源との連関性は高く、一方、映画、テレビドラマ、小説のうちフィクションについては、地域を舞台として描くことで、地域のイメージ形成やロケ地の観光資源化などの効果はあるものの、個々の観光資源との連関性は少ない。また、同じ小説でも、テレビドラマ、映画となつた作品は、活字のみの作品より情報発信力は強い。歴史・伝記等史実の物語が、歴史小説となり、さらに映画、テレビドラマなどに映像化された物

図2 物語のジャンルと観光効果



語は、ジャンルを重層し、情報発信力と地域・観光資源との連関性を兼ね備え、座標の右上に位置すると考える。ただし、フィクションであるはずのアニメの舞台が聖地化するように、物語によっては、地域との高い連関性を持つことは、例は多くなくとも起こり得ることである。

次に、観光分野において、物語が果たす機能や効果はどういったものであろうか。権(2008)⁹は、映画、音楽、アニメなどのポピュラーカルチャーと観光の関係について、①量的な増加、②注目度の増大、③対象範囲の拡大、④展開方式の多様化、といった様相の変化として指摘を行っている。本稿では、地域の観光振興の観点から物語の機能を以下のように整理する。

① 観光資源の価値や魅力を高める

物語は、史跡、景観等の観光資源についての背景などを解説したり、歴史での位置付けなどを理解させるとともに、物語に登場することにより脚色され、その価値や魅力、あるいは雰囲気や臨場感を高める機能を有する。現地ガイドやガイドブックなどが語る物語にその効果が現れる。

② 観光資源と観光資源を繋げるツールとなる

複数の観光資源や地域が同じ物語に登場する場合や、関連する物語に繋がりがある場合には、観光資源同士が結ばれ、その相乗効果により魅力が高まる。紀行・旅の物語などは典型としてそうした効果を持つ。物語により地域を異にする観光資源が繋がることにより、広域の観光ルートの形成にも寄与する。

③ 旅のテーマ・動機を与える

物語あるいは物語群に触れることが旅のテーマや動機となることがある。具体的には、物語の舞台となった地、紀行に沿った地を巡る、アニメの聖地や物語のロケ地を訪ねるなどが旅の目的となる。旅行商品化されるものではその旅のタイトルとなったりする。この場合、物語そのものが、観光資源や観光対象とみなし得る。

④ 情報発信する力や地域のブランド効果をもつ

物語が映画、テレビドラマ、小説、漫画・アニメ等として人々に届く合のにわせ、地域・観光資源の情報が発信される。物語の情報発信力、ブランド効果については、山崎・十代田 (2009)¹⁰ が物語マーケティングあるいはナラティブプランニングとして紹介するところであり、物語には、興味・関心効果、感情訴求効果、文脈理解効果、潜在意識刺激効果、行動誘発効果といったコミュニケーション効果があり、さらに、信念・思い込み等の形成を通じブランド効果を持つとされる。実際に九州では、台湾向けに「がばいばあちゃんの九州」、中国向けに「高倉健的故郷九州」というキャッチフレーズでの売り込みがなされた。口コミにおいても物語が媒体となればその効果を高める可能性がある。

しかしながら、物語観光について二つの課題を指摘しておきたい。第1は、物語観光のうち、主としてテレビドラマ、映画等映像メディアに関わる物語におけるブームとその時限性という課題である。例えば、大河ドラマによる観光客の増大は、放映時点では顕著であるが、放映終了後においては、大きな反動の減少を生じるおそれがある。ブーム時の混雑や不足するホスピタリティー等でむしろ関係観光地域の満足度が下がり観光地の評価について、マイナス効果を生じるおそれもある。この点は、鈴木 (2009)¹¹ がメディア誘発型観光の負のインパクトとして課題を指摘しているところである。ブームを好機と捉えつつも、如何に質の高い魅力やサービスを提供するか地域の準備と取り組みが課題となる。

第2は、コンテンツ・著作物に関わるものに限るが、著作権の問題である。著作物に関わる映像やタイトル、フレーズ等については、著作権法で著作権者の著作権、著作人格権

等が保護されている。観光活動においてもその使用にあたっては、著作権者の承諾又は契約が必要であり、特に、営利行為とみなされる旅行商品やイベントの設定、宣伝活動等にあたっては大きな課題となる。著作者が亡くなっているコンテンツでは著作権益確保が優先される傾向があり、著作物の利用が困難な例が多い。必要で煩雑な手続き等への地道な対応が必要であるが、非営利である公的機関や行政が必要な役割を担い、コンテンツの制作段階から関与できる場合はフィルムコミッションを戦略的に活用することが有効である。

4. 物語観光活性化のための方策

九州物語委員会における物語を活用した観光交流の促進の方策についての提言事項¹²に沿って、物語観光活性化の方策について検討することとする。施策の推進においては、地域における行政、民間、住民、大学等分野を越えた関係者の連携とともに、物語で繋がる地域と地域の連携が必要である。

(1) 物語をベースとする観光情報の提供

観光地側から提供される観光情報やガイドブックは、各観光地ごとの情報として提供される場合が多く、物語がエピソード的に断片的に紹介される傾向がある。最近においては、物語ごとに関係地域の紹介をする優れたガイドブックや情報サイトが出てきており、長崎県の「旅する長崎学」¹³は、物語をまとめ情報発信する先進的取組である。今後においては、あらゆる物語からそれぞれの観光情報（観光地・資源、交通アクセス、情報提供先等）を検索できる総合的な情報サイトの構築が期待される。九州運輸局は、九州物語委員会の収集した物語を「九州物語ライブラリー」¹⁴として公開している。

(2) 観光ボランティアガイドの拡充

観光ボランティアガイドは、全国のガイド数42,560人、団体数1,713に達し、着地型観光に欠くことのできない存在であり、九州でも、長崎さるく、九州さるくなどガイドによる街歩きが重要な観光対象となっている。地域・観光資源に関わる物語を観光者に伝える語り部の役割を持ち、物語についての知識の向上とともに、交流の担い手としてのコミュニケーション能力の向上が求められる。特定の物語への専門性を持ったガイドを養成し、その技量を評価しリストアップ又は認定するシステムが必要とされる。

(3) 物語を活用した旅の新たな提案

地域の観光資源が有する物語を点検し、魅力度が高いものについて、その物語をテーマとする旅行を着地側から旅行者やエージェントに積極的に提案すべきである。同時に、物語についてのガイドやコンシェルジェ機能の確保、案内・説明表示システムの整備などを

進める必要がある。物語についての講演会、研究会等を連携して開催すること等学習、交流、体験するプログラムづくりをしたり、物語の旅の経験者を含むコミュニケーションの場を情報ネット上に構築することも有効である。

(4) 広域ルートの形成

物語は、観光資源や観光地を結ぶ大きなツールであり、相乗効果による地域の魅力や情報発信力の向上が可能である。マイカーなどが交通手段の中心となるなかで、物語をテーマとしたきめ細かで斬新なルートの提案とともに、合わせ、道路情報ほか多様な情報提供が必要となる。物語による広域ルート形成の取組では、九州観光推進機構の「うんちくの旅」の150ルートの提案がその先進例といえる。観光圏整備法に基づく観光圏として玄海灘観光圏は、魏志倭人伝の途を副題とし、山陰観光圏は、出雲神話など神話をテーマとして、広域ルートの形成及び観光地づくりを目指している。

(5) 博物館、文学館等との連携

わが国の登録博物館・博物館相当施設は、約1,200施設あり、全体の7割が博物館及び美術館であるが、その業務は、資料や美術品の収集、保管、展示が中心であり、地域の文化機能の拠点に留まる傾向が強い。キュレーター等の能力を活かし、地域の観光関係者と連携の中で、魅力的な企画展示、講習会等の開催等地域外への発信にも努める必要がある。博物館等同士が連携し、共通のテーマで企画展示等を行うことは、情報発信と観光客の誘客に有効な手段である。高知県の博物館等で構成される「こうちミュージアムネットワーク」が作成し発行した「幕末維新の土佐 探訪図会」¹⁵は、珠玉のガイドブックとなった。

(6) フィルムコミッションの活性化と連携

地域において映画等の撮影のためにロケ地情報の提供、許認可手続き、エキストラあつせん等の支援を行うフィルムコミッション（以下、FC）の新たな物語づくりへの役割は大きい。2009年には従来の連絡協議会から組織強化を図るべく特定非営利活動法人ジャパン・FCが設立された。現在、認定FC64団体、一般FC25団体、その他ロケ支援団体11団体が加盟しており、ほとんどにおいて地方公共団体の観光部門、観光協会及びコンベンションビューローがその役割を担っている。専門的なノウハウやネットワークを持つ人材の確保が不可欠であり、撮影活動が広域で行われる実態ある中で、地方ブロック等広域でのFC連携体制の整備も必要である。九州では17団体でFC Net九州山口がブロック組織として設けられている。コンテンツの活用についての制作側とのタイアップなどコーディネーターとしての機能が組織の内外に形成されることが期待される。

(7) 物語観光を担う人材の育成

物語観光を促進するにあたっては、地域において物語を活用した情報発信や地域づくりをする人材が必要であり、観光地づくりを行うリーダーやコーディネーターの育成、地域と連携ができる博物館等のキュレーターの育成、物語の語り部たるガイドの育成、FCスタッフの育成等多様な担い手の育成確保が必要である。観光系の学部学科を置く大学が増大するなかで、地域のコンテンツや歴史等の物語の活用をも含め地域の多様な観光創造に対応できる人材の育成も必要である。地域キュレーター等の民間認定資格の構築等の取り組みが行われてきたところであるが、大学での教育カリキュラムや講習と多様なスキルを評価する資格制度の設計との連携について検討すべきである。

5. 今後の研究課題

山村(2010)¹⁶は、情報社会の到来により、新たな時代のツーリズムは、「旅行者自身がプロシューマー(生産消費者)として自らの価値観に則り、旅の楽しみを発見し、生み出していく形態が主流になる」としている。また、本学会においては、ものがたり観光行動として、旅行者自身が地域に触れ、人々と交流することにより、自らの旅の物語を語り、綴ることを、重要な視点のひとつとしているところである。今後の観光においては、このような旅行者自らによるコミュニケーション行動が大きな要素となると考えられ、物語観光における「物語」の範囲をさらに拡大し、旅行者自身が創造する物語についても検討する必要があると考えている。一方、旅行環境の変化の中で、既存の観光産業は危機的な変革を迫られる状況にある。新たなツーリズムとしての物語観光にはその対応のためのツールが多くあると考えており、これらについての多様な検討が必要であると考えている。

参考文献等

1. 九州物語委員会 (2008) 『観光交流促進における九州の物語の活用に関する報告書』
2. 佐々木土師二 (2007) 『観光旅行の心理学』 北大路書房
3. 前田勇 (1995) 『観光サービスの心理学』 学文社
4. 日本観光協会 (2008) 『宿泊旅行の利用交通機関』 自家用車 50.0%, レンタカー 5.5%
(cf. 高知県平成 22 年県外観光客入込調査では, 交通機関別で乗用車 62.8%)
5. 溝尾良隆 (2009) 『観光学全集 観光学の基礎』 原書房
6. 増渕敏之 (2010) 『物語を旅するひとびと—コンテンツツーリズムとは何か—』 彩流社
7. 山村高淑 (2010) 『アニメ・マンガで地域振興—まちのファンを生むコンテンツツーリズム
開発法—』 東京法令出版
8. 高知県 平成 22 年県外観光客入込調査 4359 千人 (前年 3156 千人)
平成 22 年観光施設等の利用実績 高知県立坂本龍馬記念館 482 千人 (前年 176 千人)
9. 権赫麟 (2008) 『ポピュラーカルチャーの観光対象化に関する考察—芸術=文化システム論
を中心に—』 日本観光研究学会第 23 回全国大会論文集
10. 山崎隆之・十代田朗 (2010) 『物語テーマの援用による観光まちづくり—松山市を事例とし
て—』 観光研究 2010.9 Vol22 No.1
11. 鈴木晃志郎 (2009) 『メディア誘発型観光の研究動向と課題』 日本観光研究学会第 24 回全
国大会論文集
12. 九州物語委員会 (2008) : 前出
13. 長崎県 (2006) 『旅する長崎学』 長崎文献社。キリシタン文化, 近代化ものがたり, 海の道,
歴史の道の 4 シリーズ 18 巻を発刊。ながさき歴史発見・発信プロジェクト推進会議による
プロジェクトであり, 東京, 京都で講座も開催。
14. 九州運輸局 『http://www.tb.mlit.go.jp/kyushu/topics/file001_020/file003/library/』
15. こうちミュージアムネットワーク (2009) 『幕末維新の土佐 探訪図会』 博物館・美術館・
図書館など高知県内の 50 の文化施設で構成。土佐・龍馬であい推進協議会と共同発行
16. 山村高淑 (2010) : 前出

遠い観光，近い観光

——吉田初三郎の鳥瞰図にあらわれた観光——

白幡洋三郎*

Travel Afar and Trips Close to Home:
Tourism in the Bird's-Eye View Maps of Yoshida Hatsusaburo

SHIRAHATA Youzaburo

1 初三郎「鳥瞰絵図」のものがたり

吉田初三郎（1884–1955）は、大正から昭和にかけてたいへんな人気を博した鳥瞰図絵師である。70余年の生涯に、日本の各地を描いた1,600点以上にのぼる（4,000点を超すとの説もある）鳥瞰図を制作し、20世紀初頭・大正～昭和初期の日本にそれまでにない風景・景観図をもたらしたことから「大正広重」と呼ばれた。江戸後期・幕末にかけて風景版画で活躍した歌川（安藤）広重の大正版というわけである。

初三郎は最初、西陣織の図案絵師として丁稚奉公に入ったが、奉公を勤めながらも洋画にあこがれる思いを消しがたく、パリ帰りの画家鹿子木孟郎かのこぎたけしろうに師事する。しかし結局「商業美術」、すなわち今でいう広告美術、ポスター画家、デザイナー方面で活躍することとなる。

初三郎の作品の中心になったのは、鉄道沿線の名所や都市、町を空から俯瞰的にみた絵地図である。ほとんどが印刷折本の形で提供されたが、その他に絵葉書、ポスター、絵本挿絵などの形態もあった。

吉田初三郎の鳥瞰図は、一見通俗的で大衆的な二流品の雰囲気を持っている。芸術品を気取った高尚な作品の印象はない。むしろ生活用品、それも中・下流の庶民的日用品の趣がある。

ところがその明快さ、わかりやすさは群を抜いている。ある地域に足を踏み入れた人物が、その地域に所在する地区名や訪れるべき観光名所について概略を知りたいと思ったとき、その願望を満たしてくれる一定の情報が簡潔に示されている。そんな絵地図なのである。そこには基本的な情報が、交通機関の路線図と共に掲載されている。

初三郎の鳥瞰図は、その通俗性や二流品の性格があるとの指摘を受けながらも、現在多くのファンを獲得している。通俗的な作品か高尚な芸術かといった、単純な二分法的色分

*国際日本文化研究センター

けの当否を越えた広範な一般の人気がある。

初三郎の鳥瞰図には何度見ても飽きさせない新鮮さや人の心を掴み、関心を強く引きつける力が備わっている、と思う。それは描かれた地域が一体どのような地域か、について初三郎自身の考えが率直・明瞭に示された図だからであろう。とくにその地域と周辺地域との違いやつながりを大きく俯瞰する包括的な視点が見られるからである。しかしそれは彼の描く図が「鳥瞰図」であり「俯瞰図」であるからという説明では足りない。むしろ注目すべきは、描写対象地域を大づかみにする「鳥瞰」「俯瞰」の巨視的な図でありながら、一方では細かな歴史や地形やその地の暮らしを思い起こさせ、目を向けさせる微視的な視点、ミクロの観点も隠れて存在するところに、彼の図の魅力が見いだされるのではないだろうか。[近い観光]

とはいえ、彼の鳥瞰図は三つ折り、四つ折り程度の小さくコンパクトな地図に過ぎない。情報が十分に掲載できる今日のようなページ数の多い冊子形式ではない。手帳をふたまわりほど大きくした程度の表紙に折り込まれた小地図の形式である。そこに必要最小限の地名（都市、町村名、池・湖・河川・山など）と神社や史跡（とくに墳墓など）の位置と名称が記されているのが特徴である。現在の視点で見て大勢の人々の心を掴み、関心を引き寄せる派手な魅力はないようにも思う。そんないわば「地味」な地図がいかにして評判を手にすることができるようになったのか。

・昭和天皇の絶賛

大正3年（1914）、前年に京阪電車から依頼されて吉田初三郎が最初に手がけた鳥瞰図『京阪電車御案内』（図1）が、この沿線にある男山八幡宮参拝のために京阪電車に乗った皇太子時代の昭和天皇の目にとまり、絶賛された。ちょうど関西地方に行啓中で、男山八幡宮に参拝するため京阪電車に乗った皇太子は、貴賓電車内に用意されていた鳥瞰図を手に取り「東京へ持ち帰って学友に頒ちたい…」と希望したとの話が伝わっている。^{注1)}この言葉に大いに励まされた吉田初三郎は、その後改良を重ねて（「初三郎式鳥瞰図」などともいわれる）独特のパノラマ案内地図を編み出すこととなる。その経緯の中に、今日また人気を集めている初三郎図の魅力を解く鍵が隠されているのではないか。初三郎自身の遍歴を含めて、もう少し詳しく歴史的経緯をたどってみよう。

2 初三郎の視点と観光の視点

吉田初三郎は明治17年（1884）に今の京都市中京区に生まれた。尋常小学校卒業後友禪の図案絵師のもとに丁稚奉公し、さらに京都三越呉服店の友禪図案部に勤務、その後東京に出て洋画家の団体「白馬会」が設立した画家養成所に属したりした。こうした軌跡を

注1) 吉田初三郎「如何にして 初三郎式鳥瞰図は生れたか?」『旅と名所』1号, 昭和3年, 1928。

挙げるだけでも、彼がいかに西洋絵画にあこがれ、洋画家を中心とするいわゆる芸術家への道を目指していたか、その強い志向性が感じられる。

その後日露戦争への従軍歴を経て帰還した後も京都に戻って洋画家鹿子木^{かのこぎ}孟郎^{たけしろう}に師事して洋画を学ぼうとしたことからその願望がいかに強かったかがわかる。ところが洋画を学ぶべき師の薦めで、初三郎は商業美術に転向する。

吉田初三郎の転機は大正元年のことであった。鹿子木孟郎に言われた言葉「洋画界から社会のために働く応用芸術家の出るようにその道を啓^{ひら}かなければいけない。」にまず心動かされた。師が言うには、「そんな人材がいらないかと長年探していたが、これまで見つからなかった。ところが吉田くん、君は、図案を描いていた経験もあり、社会との接点を探る熱心さもあり努力もよくする。この方面に最も適した人物であると思う。」「どうだ、社会のため一つ君が洋画界から出てこの仕事を始めてみては……」と言われたのである。（『如何にして初三郎式鳥瞰図は生れたか？』『旅と名所』1号、昭和3年、1928所収）「其の当時私は實に悲しかった。折角純正芸術を志して精進している私にペンキ屋になれと云うのである。」（同前）と吉田初三郎は述懐しているが、彼の心情告白は正直であり分析は冷静だ。たしかに鹿子木は吉田初三郎に芸術家の道をあきらめさせようと説得しているのである。展望の乏しい道を選ぶなど論している。初三郎自身も自らの才能の限界を自覚する冷静さを持つてはいた。それでも初三郎は「純正芸術」か「応用芸術」か、の間を揺れ動き、悩み迷った。その迷いを吹っ切れさせた決定的な「事件」が、先に挙げた皇太子（後の昭和天皇）の言葉だった。

初三郎は皇太子から「是れは奇麗で解り易い、東京に持ち帰って学友に頒ちたい」との言葉があったとの知らせを京阪電車の上層部から手紙で知らされた。これが、それまで「商業美術」への踏ん切りがつかず、迷いが残っていた初三郎を決断させ発奮させる大きな後押しとなった。

「奇麗で解り易い」の言葉は、先の資料にある吉田初三郎の証言によれば、今日（昭和3年）に至るまで自分の大切な「標語」としているものである。「このお言葉こそ、實に私の一生を決定する唯一の動機となったもの」だという。吉田初三郎の言う「名所図絵」なるものの生命は「万人が見て楽しみながら解りうべきもの、これが即ち私の作品の生命とするところ」であるともいうのである。

『京阪電車御案内』の鳥瞰図を見ると（図1）この時代にしては従来みられない斬新な鳥瞰図、パノラマ地図と言えるのかもしれないが、一見した感じは素朴で、鳥瞰図としても徹底していない概略地図である。画面背景にあたる京阪電車沿線の東側に連なる連山は、どれも似た形で特徴のない姿に描かれている。八幡市駅の東南に位置する男山は少々他とは異なる山容に描かれているものの、山上に男山八幡宮の殿舎が鎮座する様子がおとなしげに見られ、山上に向けて石段が続く様子も申し訳程度に描かれているにすぎない。

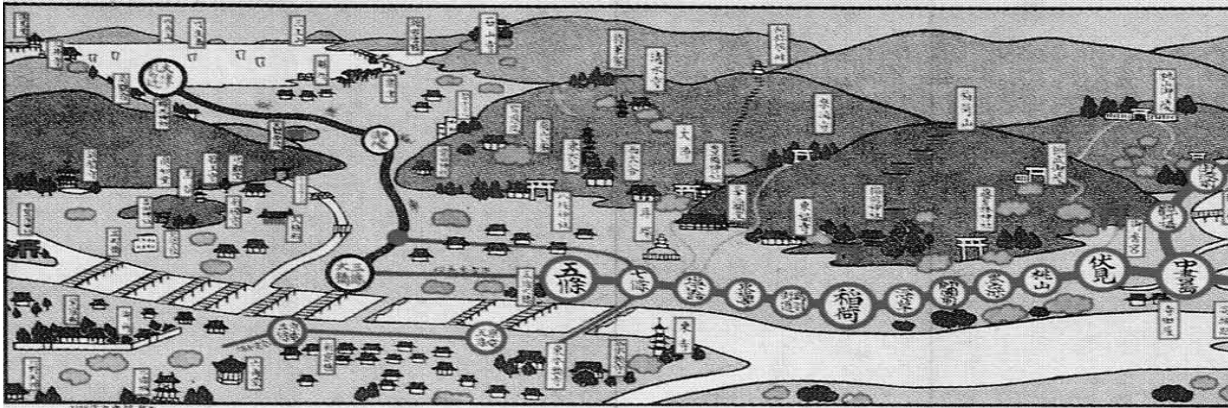


図1：『京阪電車御案内』吉田初三郎作；（大正2年，1913）（堺市博物館編『パノラマ地図を旅する「大正の広重」吉田初三郎の世界』堺市博物館，1999。より）

伏見稲荷の背後の稲荷山も鳥居が実際に立ち並ぶ様子に比べれば形だけの描き方で幾千本も並ぶ鳥居の壮観は表現できていない。山の形はお椀を伏せたような、何の個性もない山容に描かれているのみである。

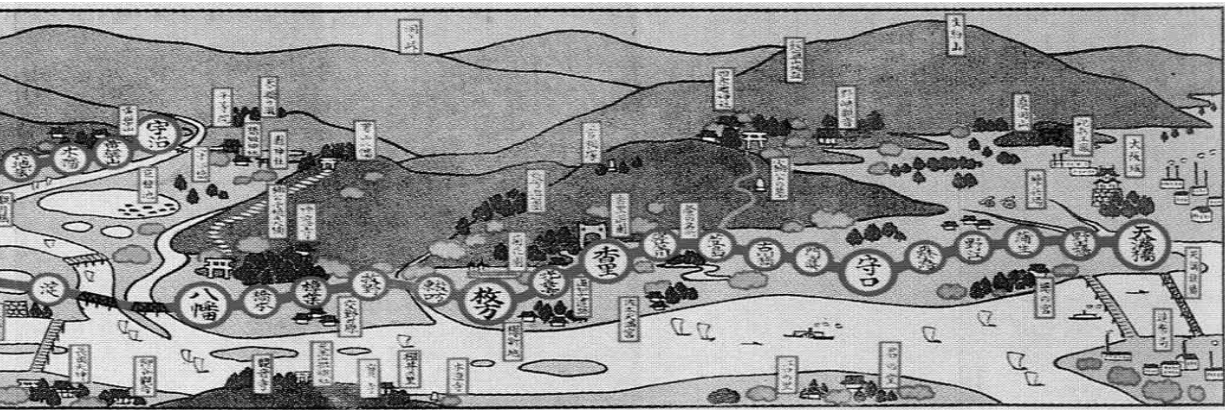
後年の吉田初三郎の鳥瞰図，すなわちある地点の上空から，地上のその地点へ引き込まれるような感じ，覗き込みたい見渡したいと思わせる，雄大なパノラマ図の片鱗は見られない。初三郎らしさはまだ現れていないと言ってよい。もちろん当時普通だった平面的鉄道路線図の単純さとは違う。平面の上に，小さな丸印で囲まれた駅名が鉄道路線を示す線で結ばれているような平板な図ではない。しかし丸印（あるいは俵型）で囲まれた地名を線でつないで街道を表現する近世の道中図からまだ抜け出せていないような図である。それでもこの絵図が，斬新なものであり，これまででないものであったことは皇太子の言葉を持ち出すまでもないだろう。

3 消費する観光，創造する観光

「私は茲^{ここ}に現代の名所図絵を残して，後の世に当年の名所と交通の関係と発達の状態を伝えたならば，一つには人文史の材料ともなり，一つには当代特有の名所絵という一種の芸術を示すこともできよう」^{注2)}

初三郎には歴史へのこだわりがある。強い歴史意識がある。自分が後世にどのような影響を与えうるか，後世が自分の仕事をどのように評価してくれるか，すなわち後世からの評判に強い関心を持っている。ここで引用した個所はそんな思いが強くあらわれているくだりである。自分のつくる鳥瞰図（＝名所図絵）は現在を忠実に表現したもので，それは後世に伝える確かな資料・貴重な資料になるというのである。現在（現状）を描くのは

注2) 吉田初三郎，前掲



ただ「現在」を宣伝するためではなく、それが歴史となり後世にとって「人文史」の材料になるべきものだからであり、それは誇るべき仕事だとの思いが初三郎にはある。別の見方をすれば、自らがつくっている鳥瞰図・案内図は、地域の歴史づくりの素材になるのだ、歴史の創造に参加するのだ、との少々過剰な自負ではないか。そしてその気負いは各地域、各地点の「ものがたり」づくりにもつながっている。

吉田初三郎は画家として依頼主のために各種の「絵画」を描いた。吉田本人が自らの職業をどう受けとめていたかは定かではないが、しかし周囲の人たちは初三郎を商業画家と見ていたし、また本人もそれで別に反発する風ではなかったろう。したがって初三郎は依頼されればポスターを描き記念切符のデザインもする、といった具合であった。吉田初三郎が描いた各種の「絵画」のうちで、一番特徴があり多数に上った作品はいうまでもなく「鳥瞰絵図」であった。吉田自身はこれを「初三郎式鳥瞰図」と言ったり「パノラマ地図」と言ったりもしていた。とくに各地の鉄道沿線案内図は人気が高く、鉄道会社からの注文が集中し、何年も待たされた会社もあったという。初三郎の作品が人気を集めたのは、彼の手にかかるといつも見慣れている地域が新鮮な場所に見えてくるからではなかったか。彼は地元地域を彼自身が持っている鳥瞰絵図という景観描写法によって新鮮な風景として描き出し、他にはない魅力を創造して地元に戻したのである。

観光事業は観光地が持っている既成の吸引力（魅力）を活用し利用する。いわば手持ちの「観光資源」を消費することで観光事業なるものを進めてゆく。こういう考え方の中の「観光資源」は利用するもの、消費するものであり、すなわち使いこなすものであった。しかしそれは同時に資源を使い尽くすものでもあった。手持ちの資源を大々的に利用・消費することで有名になればなるほど、人はやってくるが、一度あるいは数度やって来た客は、体験済み消費済みの観光資源に飽きまきて新鮮さを感じなくなる。消費されるだけでは観

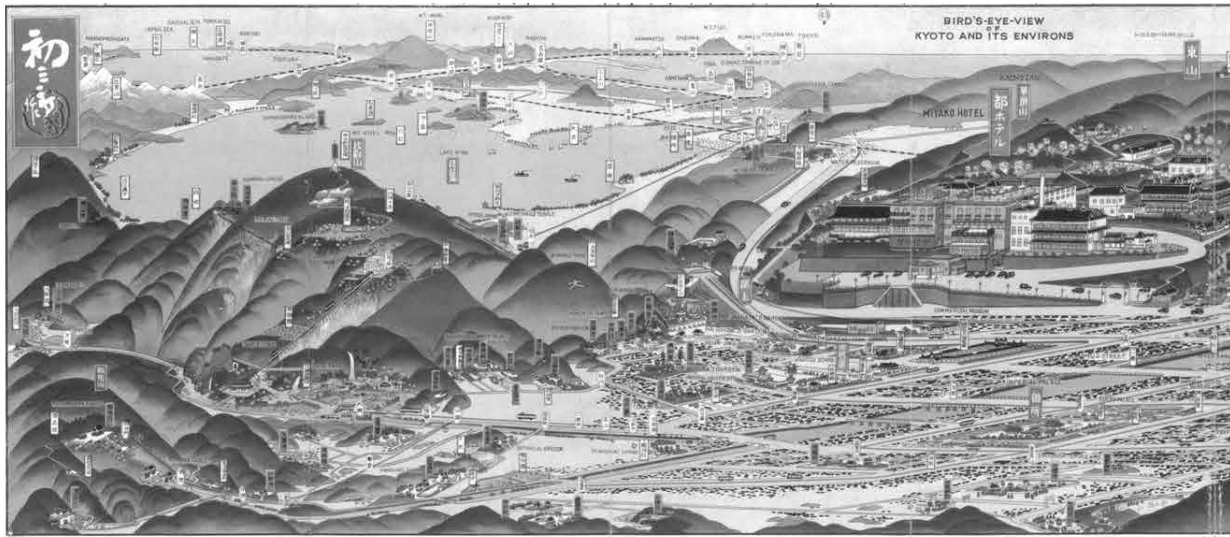
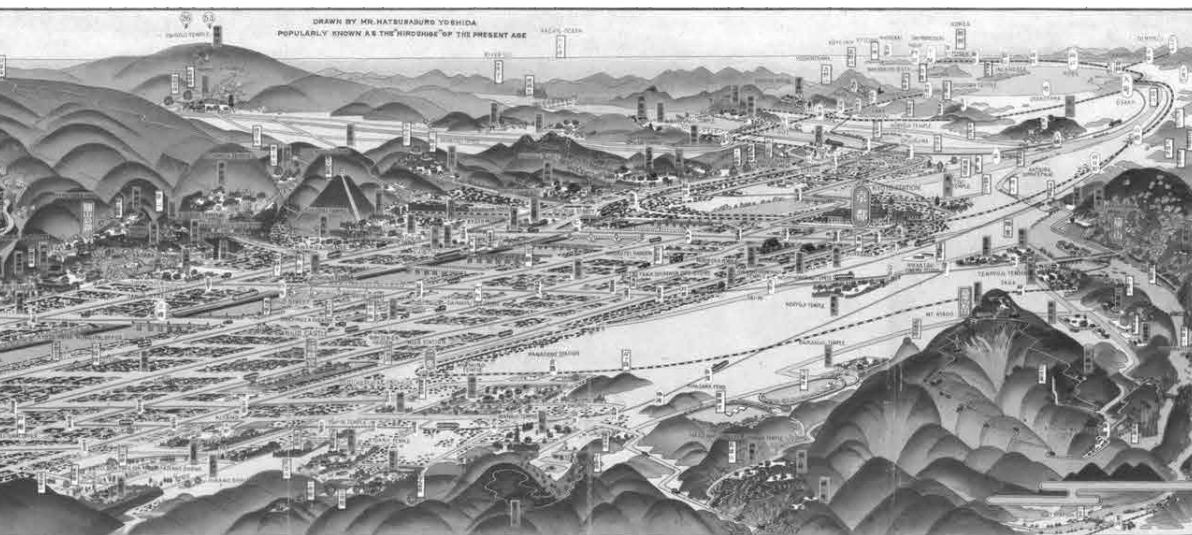


図2：『都ホテルを中心とする洛内外名所交通鳥瞰圖』吉田初三郎作；観光社出版部編輯（昭和3年，1928.11）
京都：都ホテル；19 × 100cm

光資源はやせ細るしかない。

物見遊山は、古くから行われていた「観光」行動のうちの主要なものだが、中心は参詣である。参詣を大きな柱とする物見遊山は、何らかの祈願やお礼参りなどが中心であった。熱心な参詣により霊験がもたらされたとか、いい加減な信心のせいで神罰がくだされたとかいう後日談、成果譚、霊験譚などが物見遊山から生み出された。物見遊山は、ただ名所や名物を消費するだけでなく、観光に新たな物語＝観光資源を付け加えていたのである。浮かれ気分だけが支配していたわけではなく、その中にも深い精神性が息づいており、真摯な宗教心に支えられて、多様な観光資源の創造がみられたのである。

物見遊山と聞くと古くさい社寺参詣のイメージだけで片付けられてしまい、前時代的な観光のあり方として無視される。それはもったいない。物見遊山の中には観光価値の再生産の秘密や観光資源の発掘、再発見、活性化のヒントがいくつも隠されている。というのも同じ寺や同じ神社、同じ霊地に人はなぜ繰り返し訪れるのかを考えることは、観光のリピータがいかに創り出されてゆくのか、如何にリピーターを増やすのかへの答えを見出すことにもつながるだろう。吉田初三郎の仕事の素材は、古くから行われている物見遊山、社寺参詣という既存の観光行動を参考にしたものが少なくなかったし、旧来の「遊山」「参詣」はもともと存在する地元の大事な「資源」であった。



都ホテルを中心とする洛内外所交通鳥瞰図

4 観ることと読むこと

初三郎の鳥瞰絵図（原画）は横長の長大なものが多かった。そのままを複製したのでは一般の人の手には渡りにくいし、また現実に手元にも置けない。そこで、両手で開いて見ることができる程度の大きさに印刷され、コンパクトに折り畳まれる便利な形状で提供された。

その折りたたみ式鳥瞰絵図の画面中央には主題となる対象がクローズアップされ、強調して描かれ、周囲には主題を取り巻く広い範囲の風景が描かれた。折りたたみ式鳥瞰絵図には、作者初三郎自身のこの絵に対する意気込みを記した「絵に添えて一筆」と題する文章が付けられていた。「絵に添えて一筆」には初三郎の旅行に対する考え、観光のありかたへの主張が強く盛り込まれていた。鳥瞰図に加えて、この文章によって初三郎は、当該地域への観光客のかかわり方がどうあるべきか、その一例を自らの主張として熱っぽく書き記した。そしてのちには数多くの図に添えられたこの文章をまとめて『絵に添えて一筆集』（上巻、昭和5年）と題した本を編んだ。^{注3)}

初三郎が自らの鳥瞰絵図の裏面に印刷し掲載した「絵に添えて一筆」は、そのタイトルにある「添えて」の表現を大きく踏み越える内容が記されている。そこには吉田初三郎が抱いていた観光の考えが強烈に示されている。吉田初三郎が描き、書いたものなから、彼にとって他者・観光客たちに案内を提供することの意味、ある地域についての情報を与えることの意味は何であったのかを考えてみたい。そのことは初三郎にとっての「観光」の意味を解明することになるだろう。（とくに観光用の鳥瞰図を描いた絵師初三郎が文章を大事にし、言葉の力を重く受け止めていたことが了解される。）いくつかの例をとりあ

注3) 本書の奥付には「吉田初三郎先生叢書第1輯」の記載がある。また続巻を予定してたためか、この巻は「上巻」とされたが、その後続刊が出版された事実は確認できない。



図3：『大丸を中心とする京都名所案内鳥瞰図: 御大禮紀念』吉田初三郎作; 観光社出版部編輯; 発行：京都, 大丸 (昭和3年, 1928) 18 × 77cm

げてみよう。

昭和3年秋に刊行された『得月楼を中心とする土佐名所交通鳥瞰図』は、高知の旅館得月楼を中心に高知市街が描かれている。旅館側の依頼による制作であることはいうまでもない。まずは旅館の評判を述べ、さらに高知の南国であることを雪の北国と対比して紹介する。そして次のような記述がある。

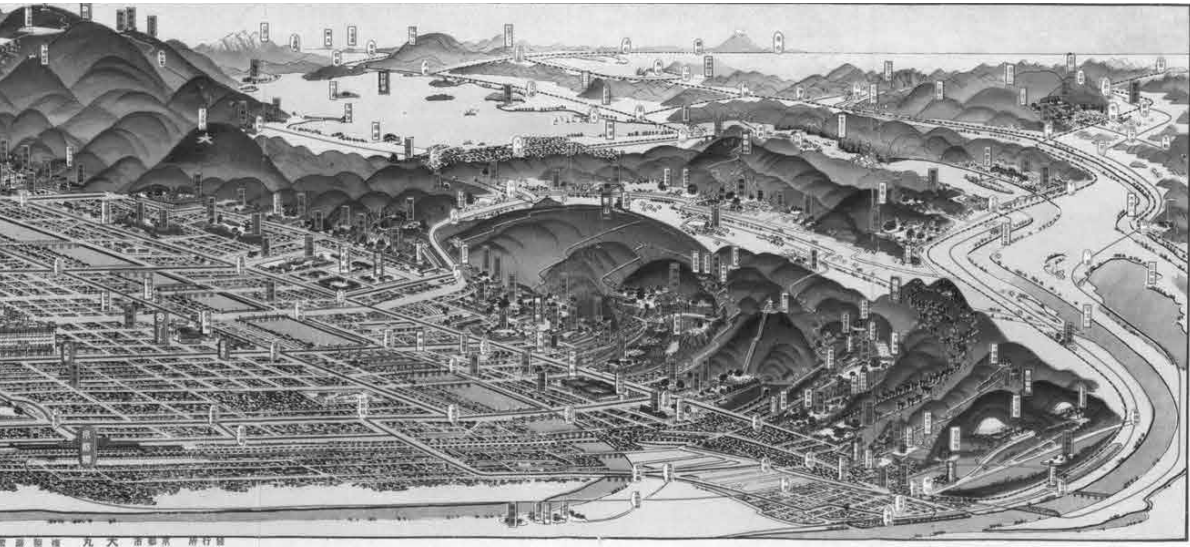
「得月楼の名物は古木の盆梅である。

雪の鎧戸なほ固ききさらぎの末つ方、南国の春ははやたけて、たゞ見る大広間一ぱいに展覧せられた、さても見事な梅花の清爽さ！ 中には三百年に余る古木もあつて、土佐の興亡盛衰、波瀾万畳の歴史を眼前に物語るが如くである。」(「繪に添えて一筆」『得月楼を中心とする土佐名所交通鳥瞰図』前掲, 昭和3年所収)

高知の春夏秋冬の名所・名物を紹介するのに、まず得月楼の春の盆梅を挙げて、ついで夏の室戸岬を推奨する、といった構成である。

昭和2年刊行の博多案内『博多名所遊覧圖繪 水野旅館を中心とする』は高知と同じく地元の老舗旅館を中心に据えて市街案内図とした鳥瞰図である。

「^{かえりみ}願れば私は曾つて政府の命を拝し、鉄道省より発行の鉄道旅行案内挿絵執筆に当り、再三日本全国に写生旅行を試みて、可なり各地に於ける、其土地特有の気分から生れる種々な俚謡に親しみを持つやうになつたが、未だ以て此の博多節ほど情味の洗練せられたのを知らない」(「繪に添えて一筆」『博多名所遊覧圖繪 水野旅館を中心とする』前掲, 昭和2年所収)



博多市街の案内をこころみる手法として、旅館の心地よさをたたえた上で、博多節の情緒深さを引き合いに出して（「筑紫名所は名島に宰府、芥屋の大門の朝あらし 宵は涙を絞りの浴衣、とけてうれしい博多織」）紹介する。先の盆梅に対してこちらは博多節という音曲を持ち出すのである。

吉田初三郎の鳥瞰図は都市の全体像を一枚の絵図に収める作図法で都市景観を雄大に描き、都市の広がりと繁栄を浮き彫りにしようとするものだ。しかも、一都市にとどまることなく本州、四国、九州、北海道にわたる日本列島を自在に描き入れ、さらには朝鮮半島、中国大陸までも含む壮大な図をつくりあげる。ところが、細部にこだわらないかのような壮大な構図の中に、焦点となる旅館や百貨店、名所などを細かく描き込むのである。

吉田初三郎の鳥瞰絵図は鳥瞰図ならではの雄大な視点と、観光に欠かせない細部への視点が組み合わせられている。言い換えれば「気宇壮大なマクロ」観光と「地域・身のミクロ」観光、その二つ、性格の異なる二つの観光の可能性に応える構成をとっている。

そんな初三郎図の特徴ある構成を理解するために、彼の「鳥瞰絵図」が確立した時期とされている昭和初期の作品、彼自身が「如何にして 初三郎式鳥瞰図は生れたか？」を発表した昭和3年の二つの図を取り上げて比較してみよう。どちらも京都の市街案内図としてつくられた『都ホテルを中心とする洛内外名所交通鳥瞰図』と『大丸を中心とする京都名所案内鳥瞰図：御大禮記念』である。

『都ホテルを中心とする洛内外名所交通鳥瞰図』は北山連峰の上空あたりからおおよそ南南西の方角を見下ろし、正面に都ホテルの偉容を描く。京都市街地と観光スポットを北東の

比叡山（画面左端）から南の京都駅（画面右端）にかけて描写し、比叡山の彼方（画面左端上方）には遙かに小さな富士山の姿と横浜・東京が（東海道線の駅名かもしくは地名として）描かれている。京都駅の彼方（画面右端上方）は大阪、和歌山。その先に瀬戸内海を越えて九州、釜山・朝鮮の文字が描かれている。

この図は京都市内の一隅にある都ホテルを中心に描きながら、東の東京・横浜から西は釜山・朝鮮までを視野に入れた壮大な図になっている。その一方で、市中の62カ所にものぼる観光地を挙げて解説し、地図上に通し番号を記して位置を示す。マクロとミクロの視点が自在に組み合わせられている。

もう一つの『大丸を中心とせる京都名所案内鳥瞰図：御大禮記念』（昭和3年）では、京都市南部上空からおよそ北北東の方角を見下ろし、画面の中心に大丸百貨店を大きく描く。眼下に京都駅（画面下端）があり、京都の市街地が上方ならびに左右に描かれる。比叡山（画面左上）の左方には丹後、天橋立が望見され、はるか彼方に小さく下関が描かれている。画面左下は淀川が大阪に向かって流れる光景で、左方へ四国・瀬戸内海、左端には九州、釜山、朝鮮が描かれている。画面右方には京都南西部から和歌山方面までが描かれ、さらに横浜・東京方面（右端上方）北海道・樺太（画面上方中央寄り）までが描かれている。

現在にもつながる観光図としてみると、画面左端の嵐山地区から画面右端の宇治地区までの間を主要な京都市街とみて詳しく描いた、地図による京都案内書とみなしうる。樺太・北海道から朝鮮・九州に至る東アジア列島における本州の位置を示したうえで、そのなかでも洛西・嵐山から洛南・宇治の間に存在する京都観光地を取り上げたガイドブックという雄大なスケールを表現している。初三郎の「ガイドブック」にみられる観光的視野は、独特の超大スケールを基盤としている。しかし他方では微細な観光スポットめぐりも配置されているような、大小のスケールが両立した「観光」であった。

5 遠い観光，近い観光——日本旅行史における初三郎鳥瞰図の位置

日本の旅行熱は昭和初期に大きな盛り上がりを見せた。もっともその下地はすでに大正期からあって、旅行愛好家の団体が各地で誕生していた。その中でも比較的大きな団体の一つが、大正9年に東京で生まれた「日本旅行倶楽部」であった。この団体は、健全な旅行を普及させることをうたっていた。いわゆる旅の恥はかきすて、をやめさせようと「旅行道徳」の向上をスローガンに掲げていた。そしてまた仲居や給仕への心付けなど、旅館での「茶代」の廃止を訴えていた。「茶代」なるものは旅行の発展にとって障害になるとして強く反対する運動だった。一方、当時人気が高まっていたハイキングに関心を持つ人々が集まって結成した「東京アルカウ（歩こう）会」という団体も生まれた。

これら日本旅行倶楽部や東京アルカウ会といった民間団体の活動の高まりを受けて旅行関係の諸団体の中央連絡機関が誕生した。それは「日本旅行文化協会」と称し、事務局は鉄道省内に置かれた。この時代、鉄道省は官民あわせて旅行界全体をまとめ上げる中心であった。日本旅行文化協会の発足は大正13年のことである。

協会の事務活動は鉄道省がいない、産官の交通関連企業、ならびに民間の旅行愛好組織などが参加・結集していた。日本の旅行関係者が旅行を産業の一部門として大きくとりあげはじめる草創期の観があった。そしてこの会は雑誌「旅」を創刊した。この雑誌は旅行専門雑誌として成長してゆき、その後、日本交通公社刊の『旅』として引き継がれ、21世紀初頭まで続く。(正確に言うと1924年大正13年に創刊され、戦中戦後の1943年から46年まで一時休刊があり、2004年の1月まで計79年間に924号が発行されることになる旅行の総合雑誌となった。詳細は森正人『昭和旅行誌 雑誌「旅」を読む』中央公論新社、2010年。参照)

大正初期から昭和初期にかけて、旅行が生活の中の大事な要素として注目され大きくとりあげられるようになってきた。旅行の成長は日本社会の成長や充実度を示す指標にもなっていたといえる。大都市、地方都市、小さな集落などを問わず日本各地への関心が高まり、日本の隅々への「好奇心」が刺激され、燃え上がったのである。その火付け役として初三郎の鳥瞰絵図があった。

従来、私の説「旅行は昭和が生んだ庶民の『新文化』」(白幡『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』中公新書、1996。)も含めて、大正期から昭和初期(に至る1910、20年代)にかけては、旅行界、観光界の活動が新しい段階に入り、「新文化」が生まれつつあったとの説が受け入れられてきたと思う。旅行という「新文化」の内容に、日本八景の選定(昭和2年)、旅行関係諸団体の設立(大正末～昭和初年)、旅行の総合商社というべきJTBの発足(昭和2年)、国立公園制度の誕生・国立公園法の成立(昭和6年)、実際の国立公園の指定(昭和9年)、などが挙げられる。ここで、私が旧著で見落としていたのが吉田初三郎の活動、とくに全国に及ぶ多数の鳥瞰絵図の作成と、その冊子体での膨大な出版である。

日本文化史の中に余暇活動をしっかりと位置づけること、とくに大正期から戦前戦後史を経て21世紀にいたる日本近代文化史の中に、活発な庶民の余暇活動と旅行関連産業の活気を取り上げる必要がある。日本における近代の「新文化」として、昭和の旅行文化隆盛を忘れては日本近代庶民生活史、日本近代文化史は十分に描けない。

大正～昭和初期の吉田初三郎が、旅行にどんな期待を寄せていたか、観光がもっている力をどれくらい評価していたか、以下では初三郎絵図ではなく初三郎の「文章」をもとにたどってみる。

吉田初三郎が「初三郎式」と自負する鳥瞰絵図を確立したころ、日本の風景について国

民的規模での関心が生み出された。それは昭和2年、現在の毎日新聞社の前身である東京日日新聞と大阪毎日新聞が主催して行われた「日本新八景選定」というハガキによる各地の風景の人気投票である。投票行動が過熱化し、国民の関心は「熱狂」にまで及んだが、それは新聞社をはじめとする言論メディアの力によるところが大きかった。これが旅行を活性化させた最初の「ディスカバー・ジャパン」といえよう。

吉田初三郎は、主婦之友社から依頼されて、「日本新八景」八つを全部載せた『日本八景名所図繪』を制作した。^{注4)} 選定結果が発表されてから三年目の昭和5年のことである。八つの絵が並ぶ『図繪』に掲載された「繪に添へて一筆」は、吉田初三郎の旅行論になっている。

「『旅』は、現代生活から切り離すことのできないもので、既に娯楽遊覧の域を離れ、実際的に家庭の浄化を図る最もよき手段の一つであり、平凡化せんとする一家の空気を転換する最も賢明な策である。」

旅の効用をここでは家庭の視点から評価している。初三郎は旅を家族・家庭の「空気を転換する」のに最良の手段と述べている。そして発行が初夏の頃であったからであろうか「夏は一家を挙げて旅行のシーズンである。山に海に湖畔に河辺に温泉に、緑陰と涼風をお趁うて、のが瀟煩雑なる都市生活を離れ苦熱の井路を脱れて大自然の懐に還る。まことに働きたるもの、必ずねぎら稿はるべき、天の恵示に外ならない。」

と夏の旅行シーズンの活用、自然風景地を目的地にすることを勧め、都市生活・労働からの脱出を説いている。

「『旅』は、一家の主婦によつて提唱せらるべきで、家内挙つて趣味と教養と和楽のために未知の土地を訪れ、その風物に接して、一家全体の知識とも追憶ともすることは、実に大切な生活の一要素である。」

主婦之友社からの依頼ということも手伝っているとはいえ、旅がまだ庶民の手からは遠い時代、庶民にはぜいたくな時代に、家庭や主婦から旅を提案すべきだと主張する。そして、未知の土地を訪れる旅での体験を通して一家の教養を高めることを説いている。その目的地を毎日の労働からのがれるための休養の観点から選ぶ（上掲）考え方が示される。それに加えて、後に挙げる引用のように、遊覧探勝の観光的視点以外の科学的観点や歴史的興味から選ぶことも勧めている。

吉田初三郎は、この引用文中では「旅」を用い、わずかに「旅行」と書くが、「観光」は使わなかった。しかし内容からみると日本八景の「観光地」としての性格をいろいろな角度から考えていたことがわかる。

「…（日本八景の）何れもが、昭和日本の代表的風光の一典型であり、併せて遊覧探勝者のために、単なる旅の興味以外、實際的の寄与を一科学的の研究とか、史実伝説の物語とかいふ、社会人的教養の一端を、直接教へてくれる屈指の場所である…」

注4) 『日本八景名所圖繪』吉田初三郎作（昭和5年,1930）東京：主婦之友社

吉田初三郎にとっての観光は、先に述べたように〈「気宇壮大なマクロ」観光と「地域・身辺のミクロ」観光、その二つ、性格の異なる二つの観光の可能性に応える構成をとっている。〉さらに付け加えるべき視点は、吉田初三郎が全国の著名な観光地のほかに、依頼があれば知名度の低い市、町、村や知られざる地域の名所・名勝までも区別なく取り上げたことである。著名な観光地は全国に知られてはいるが、その地域に住む人は一握りの少数で、全国大多数の人にとっては遠い観光地である。いっぽう、知名度の低い町や知られざる地域の名所も全国の人にとって無名の、関心の及ばない観光地（遠い観光地）である。吉田初三郎は、有名無名どちらの地域も依頼があれば区別なく入念な取材をもとに描き込むことで、多くの人々にとっての遠い観光地を「近い観光地」に書き換えた、と言えよう。一枚の鳥瞰図の中に、はるか海外の土地も身近な地域も同じく描き入れる手法。そして全国の景勝地、都市、社寺、旅館など知名度の差異にかかわらず同じく描き込む姿勢。そこには吉田初三郎が創作した「鳥瞰絵図」による新しい「観光」への提案があった。

参考文献

- ・堺市博物館編（1999）『パノラマ地図を旅する「大正の広重」吉田初三郎の世界』堺市博物館
- ・白幡洋三郎（1996）『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』中公新書
- ・堀田典裕（2009）『吉田初三郎の鳥瞰図を読む：描かれた近代日本の風景』河出書房新社
- ・森正人（2010）『昭和旅行誌 雑誌「旅」を読む』中央公論新社

「ものがたり」に 触発される観光行動

高田公理*

Tourism Touched Off by Narratives

TAKADA Yasutaka

「観光」の初出は「占い」の指南書『易経』にある。まず、その原義を明らかにする。その上で、近代初期の日本とイギリスにおけるエリートの典型的な観光行動が果たした役割と現代日本における観光の大衆的な普及の意味を検討する。

ついで「ものがたり」と「単なる事実の叙述」の違いに触れ、それを「語る（場合によると『騙る』）人の思い」が、社会や個人の人生と生活に及ぼす影響を考察する。

これらを踏まえて、少し昔の日本人と現代日本人の観光行動の違いを検討する。その結果、現代日本人のそれに、ある種の主体性が付与されることで、かつて『易経』が記した「観光の本義」が大衆的に普及しつつあることを明らかにする。同時に彼ら自身が、観光経験にかかわる「ものがたり」を、ブログなどの新しいメディアを通して広く伝えることで、他者の観光行動を誘発する役割を果たしつつあることを示唆する。

あわせて現代日本では、テレビ放送やテーマパークなど、さまざまな経路を通して人々に伝えられる「ものがたり」が、観光行動に及ぼしている事例を紹介する。

これらの考察を通して、さまざまな「ものがたり」の創出という人々や地域の「行動」が、社会全体の観光行動を下支えする役割を果たしていることが明らかとなる。

1. 『易経』に記された「観光」の原義と現代

「観光」という言葉の初出は約3500年前、中国の周時代の古典『易経』にある。この書物は本来「占い」の指南書であった。

「占い」とは何か。不確かな未来の運勢や成り行きを見通そうとする試みである。それが昔の中国では、個人の運勢ではなく、国の未来を予測するために用いられた。

この書物の一節に「国の光を覩る。もって王に^{ひん}資たるに利あり。賓たらんことを^{こいねがう}尚なり」

* 佛教大学社会学部

という記述がある。それが意味するところは「一国の王たる者は、諸国をめぐって『国の光』を見てこなければならない」といったことであろう。

では「国の光」とは何か。それは、さまざまな国の豊かな自然、そこで営まれている人々の快適な暮らし、それに支えられて育まれる優れた文化などを指すと考えられる。

それらに接することで、王の知識は増え、心身ともに豊かになる。すると王は、今度は自分の国に帰って、新たな「国の光」を発することができる。つまり「観」の文字には「みる」と同時に「しめす」という意味がはらまれているのである。

2. 『米欧回覧実記』とイザベラ・バード『日本奥地紀行』

現代から少し時代をさかのぼってみる。すると150年ぐらい前の明治時代、当時の政治家や高級官僚たちが、同じことを試みていたことが分かる。

たとえば、岩倉具視を団長とする特命全権大使岩倉米欧回覧使節団である。随員には、伊藤博文、木戸孝允、大久保利通など、当時の日本のエリートたちが名を連ねていた。

そんな使節団が1871（明治3）年に日本を出発する。そして1年9か月、到来したばかりの黒船でアメリカ、イギリス、フランス、ドイツなど、米欧の先進12カ国を訪れる。その遠征からの帰国後、メンバーの一人・久米邦武が『特命全権大使米欧回覧実記』という報告書をまとめて公刊する。その表紙をめくると、最初のページに「観光」の2文字が大書されている。

この書物を参照すると、彼らの目的が米欧の先進的な近代文明を視察することにあったことが分かる。それが彼らの見たかった欧米諸国の「国の光」だったのである。実際、ストックホルムの製鉄所、ブリュッセルのガラス工場、ニューヨークの高架鉄道など、当時の欧米の先端の科学技術を駆使した産業施設や都市施設の見聞記が記されている。

不思議はない。当時の日本は、近代の価値観で評価すると、貧しく、かつ遅れていた。それは日本が、直前の江戸時代に、いわゆる「鎖国」状態にあったからでもある。そんな気分が「夢中二千年ヲ経過シタリ」などという表現に読み取れる。その上で同書は「これから日本は『礼の国』から『富の国』になるのだ」という意味の文言を記すことになる。

ところで、同じころ日本にやって来たイザベラ・バード（Isabella Lucy Bird：1831～1904）というイギリス人の女性がいる。

この時代のイギリスでは、前世紀に始まった産業革命に伴う工業化が進み、都市の生活環境が悪化していた。石炭の燃焼に伴う排気で大気は汚染し、過酷な資本制経済のもと、労働者は劣悪な生活を強いられ、アルコール依存に陥る人々も少なくなかった。

そんなイギリスから日本にやってきたイザベラ・バードは、日本の米欧使節団とはまったく正反対に、東北地方や北海道などの田舎を回り、その体験を『日本奥地紀行』という書物にまとめる。その中で彼女は、「東北地方は日本のアルカディアだ」と言い放っている。

ここでいう「アルカディア」とは、古代ギリシャの牧歌的な楽園のことである。つまり彼女は、日本の米欧使節団がめざしたのとは正反対の、緑豊かな当時の東北地方を旅することで、そこに、いわば「日本という国の光」を見て取ったのである。

それから、およそ150年前後、日本とイギリスは大きな変化を体験した。その結果がもたらした典型的な風景を比較してみると、興味深いことに気づかされる。

まず、日本のそれは、超高層ビルが林立する都市の風景や石油コンビナートが広がる工場地帯の風景によって代表される。それに対して、イギリスのそれは、豊かな緑と花が咲き乱れる、自然の風物を巧みに取り込んだ田園や庭園の風景によって代表される。

こうした物言いが、恣意的であることは否定しない。しかし、現代日本の若い女性たちが、わざわざイギリスへガーデニングを学びに出かけるのが一種のブームになっているのも事実である。とすれば、必ずしも荒唐無稽な捉え方とも言えまい。

実際、イギリスでガーデニングが盛んになった理由の一つは、イサベラ・バードの旅行記が広く読まれたことにある。それと対照的な日本の都市風景は、明らかに『米欧回覧実記』が、いわば「発見」した「近代化」の諸要素を取り込んだ結果にほかなるまい。

してみれば、150年前の日本人とイギリス人が「観光」の過程で出会った「国の光」が、それぞれの「未来」をめざす「国造り」の「ものがたり」として機能し、今日の両国の文明の姿を現実化したのだと考えることができる。

3. 現代日本の大衆にとっての「観光」と生活の革新

このように「観光」は、かつては「王の仕事」であり、近代初期には「エリートの仕事」でもあった。それが社会の近代化と共に、経済的な余裕を手に入れた一般の人々の楽しみに変化していく。そういえば、ある社会の経済水準が1人当たりGDPに換算して、日本円で60万円程度になると、海外旅行をする人の数が増えるといわれる。

ところで、ごく普通の現代人の観光にも、かつての王やエリートの観光に似た側面が伴う。観光経験が、しばしば新しい知識や知恵をもたらすからである。すると、その知識や知恵を、ふだんの生活に活かしてみようと人は考えがちになる。

たとえばイタリア旅行をした若い女性が、

「イタ飯ってカッコイイな。おいしいし、健康にもいいな」

と真似しはじめる。すると、彼女の生活は、新しい要素を取り込んで少し豊かになる。

それだけではない。そんな体験は、つい他者に伝えたくなる。土産話をはじめ、写真、俳句、絵手紙、旅日記……これらは、観光行動の過程で出会ったモノやヒトや体験に関する、百人百通りの「ものがたり」にほかならない。

それらは今日、インターネット上のHPやブログ、FACEBOOKやMIXIなど、さまざまなSNSを通して、きわめて容易に、広く世間の人々の耳目に届けられる。それに触れ

たことで、旅や観光に出かけようと思う人も少なくはない。なんのことはない、旅や観光に出かけた人々が、そのまま人々の新しい観光を触発する時代がやってくるのである。

かつて団体旅行が主流を占めた時代に、観光を先導したのは旅行会社やマスコミ、巨大レジャー産業であった。それに対して、個人や興味と関心を共にする少人数の旅行が増える現代の旅や観光は、しばしば地域や個人が創り出すものがたりによって触発されるのである。

4. 社会も人も、みな「ものがたり」に生きる

ここで「ものがたり」について少し掘り下げておく。このことに関連して、亡くなったユンク派の心理療法家の河合隼雄は「物語と心理療法」という講演記録のなかで概略、つぎのように説明している（カッコ内と文責は筆者）。

「海へ行きまして体長23センチのタイを釣りました」と言えば、「ああ、そうですか」で終わりになる。ところが「こんな釣った」と、手で示した幅を動かしたりすると、それにつれて相手の心も動いて、「おれも釣りに行こうか」と、相手の人が思ったりする。ただし、あまり大きすぎる話をする、相手は「騙られた」ということが分かって、その場合は「だまし」になる。つまり「語り」には、つねに「だまし」がどこかに入り込んでいる。そこ面白い。

事実についての説明だけでは、聞く人の心が動かない。そこに話し手の「思い」が投影された「語り」が加わることで初めて、事実への興味と関心が呼び起こされる。

先に見たように、少なくとも19世紀なかばから現代に至る日本とイギリスは、ある局面で、当時の両国のエリートが紹介した「他国の光」に触発された「ものがたり」に導かれて、その後の国造りを進めた。その際、何を「光」と捉えるかは、それぞれの国の人々の心に潜んでいたのであろう「思い」によって、さまざまに異なったのであった。

人それぞれの思いも同じである。たとえば職業の選択基準は、必ずしも、その職業に不可分な「より高い収入や社会的地位」によって左右されるとは限らない。

たとえば、栄光ゼミナールが実施した調査の結果によると、「小学生の夢」は、つぎのような相貌を呈したという。

男子……① サッカー選手 (15.4%)、② プロ野球選手 (14.7%)、③ スポーツ選手 (5.9%)、④ 学者 (4.5%)、⑤ お金持ち (2.6%)、⑥ 大工 (2.6%)、⑦ ゲームクリエイター (2.4%)、⑧ タレント・アイドル・役者 (2.0%)、⑨ 料理人 (1.9%)、⑩ 漫画家 (1.7%)、⑩ 宇宙飛行士 (1.7%)、⑫ お菓子屋さん・パティシエ (1.5%)、⑬ 医師 (1.3%)、⑬ お笑い芸人 (1.3%)、⑬ パイロット (1.3%)

女子……① お菓子屋さん・パティシエ (24.3%)、② タレント・アイドル・役者 (7.8%)、③ お花屋さん (4.8%)、④ 保育士 (4.3%)、⑤ トリマー (3.5%)、⑥ 医師 (3.3%)、

⑥ パン屋さん (3.3%), ⑧ スポーツ選手 (3.0%), ⑨ ピアニスト (2.8%), ⑩ 美容師 (2.8%), ⑪ 看護師 (2.4%), ⑫ 学校の先生 (2.2%), ⑬ 漫画家 (1.7%), ⑭ デザイナー (1.7%), ⑮ ダンサー (1.7%)

こうした「夢」は「その人が送りたい人生のイメージ」、いいかえれば「人それぞれのものがたり」の主題だと考えることができる。

と述べたところで思い出すべきは「人生と旅=観光」とのアナロジーである。人間の生活や人生と同様、旅や観光もまた「そこで何を試み、何を受け取りたいのか」という「ものがたり」なしには、十全の成果を享受することはむづかしい。

やや唐突だが、そこで、立石寺である。それは山形市北東に位置する天台宗の寺である。険しい山壁に展開する、その姿は美しい。しかし、それだけで天下の名勝の一つに数えられるようになったかどうか。

閑さや 巖にしみ入る 蟬の声

余りにも有名なこの句は、1689 (元禄2) 年、旅の途上でここを訪れた俳聖・松尾芭蕉が残したものである。『おくのほそ道』に記されたこの句の直前の文章を読むと、この句が誕生したのは、「佳景寂寞」のなか、「巖にしみ入る蟬の声」が芭蕉の鼓膜を振るわせた瞬間に、彼の内面の「閑かさ」が際だった結果の脈絡がもたらしたものらしい。

むろん、句の解釈は、読む人の自由である。ただ、先人の残した十七文字を、女流俳人の黛まどかは「置き手紙」と呼ぶ。それを反芻した後世の人は、自らの心身の赴く先を確かめるために、ときに現場に足を運ぼうとする。

モノヤコトに関する事実だけでは、こうは行かない。それらに関して「ものがたられたこと」がある場所を訪れようとする気持を触発する。和歌に引証された歌枕の多くが、人々を呼び寄せるのも、同じだと考えてよい。

5. 現代日本における観光イメージの変容

そこで、ごく最近までの日本で「観光」という言葉が呼び起こしがちだった典型的なイメージを描き出してみる。すると、たとえば、

① 職場や地域の人々、あるいは生徒や学生などが、② 団体を組んで、③ 訪れる価値があるとされてきた定番の名所・旧跡などを訪れ、やがて、④ 夕方には温泉で疲れを癒し、⑤ 夜は全員が出席する宴会を催し、⑥ せいぜい1, 2泊したあと、⑦ お仕着せの土産物を買って家に帰る。

といったあたりに収束する。そこには抜きがたい他律性が感じられる。

海外観光旅行の場合も、多数の人々を誘致したパリ、ロンドン、ニューヨークあたりへのバックツアーは、よく似たイメージを呼び起こす。このように、これまで通常の「観光」は「俗っぽい関心に彩られた単なる物見遊山」と捉えられがちであった。

ところが最近、こうしたイメージとは異なる観光のかたちが広く普及するようになった。それを、先の紋切り型観光との比較で定式化してみよう。

① 家族や気のあう友人・知人などが、② 小グループ（もしくは個人で）、③ 自分たちの関心を引く場所を訪れ、④ そこに特有の自然や文化を楽しみ、⑤ 自分たちの興味に導かれて多様な体験を試み、⑥ 場合によると長期に滞在し、⑦ それぞれの心に残る記憶を絵や写真、俳句や短歌や旅行記などの表現活動に昇華して日常に戻る。

こうなると当然、観光の形も「十人十色」になる。旅先で茶碗をひねろうという人もおれば、わざわざ軍艦島を訪れようという人も出てこよう。森や海辺にじっくり腰を据えて、動物や植物などの自然観察にふけろうという人、土地ごとの文化を深く学ぼうという人も珍しくはなくなるだろう。つまり観光行動に、なにがしかの自律性が付与されつつあるといってもよいのではないか。

こうした旅や観光の新しい動向を示唆する事例が、日本を代表する観光都市・京都などでも顕著になりつつある。

というのもひと昔前なら、金閣寺や清水寺が大賑わいしたものである。むろん今も、これらの観光スポットの人气が低下したわけではない。ただ他方で、従来は必ずしも多くの観光客に顧みられなかった場所の人气が高まっている。たとえば錦市場の八百屋が経営している町家のレストランなどは、その一例である。そこで伝来の京野菜の料理を食べるのが楽しいという人々が多数、こうしたレストランを訪れるようになった。

あるいは、ウナギの寝床のように奥に細長い京町家の坪庭や簾をつぶさに観察する。蒸し暑い京都の夏の盛りに、ちょっと坪庭に水をまくと、そこに「極小の高気圧」ができて、さっと涼しい風が吹く。そういう京都の暮らしの知恵を心に残す体験を求める人も多い。

それは、電気を大量に使う空調機の使用に比べるとまどろっこしい。しかし、低炭素社会にも適応しうる、「ちょっとカッコイイ」一種の生活の革新だともいえる。

そんな京都の生活文化をめぐる「ものがたり」と、それがはらんでいる「光」に出合つて、ふだんの暮らしに活かす。そこには、文字通り「観光の本義」にのっとった旅や観光の新しい形が見え隠れしている。

6. 土地に結びついたものがたりの集客力

ところで、がらっと話は変わるが、現代日本でもものがたりといえば、毎年、趣向を凝らして放映されるNHK大河ドラマが思い出される。最初の放映は1963（昭和38）年の「花の生涯」であった。主人公の井伊直弼は、幕末の江戸幕府で大老を務め、日米修好通商条約に調印し、日本の開国と近代化を断行した近江藩主である。当然、反対勢力が現れた。それを強権で粛清し、結果、その反動を受けて暗殺される。

この番組を記念する「花の生涯記念碑」が彦根城内にある。しかし、いまだ放映当時は

高度経済成長の初期。旅や観光の主流は、団体で名所見物をするお仕着せのバックツアーであった。番組の影響で彦根城観光が盛んになるということはなかった。

それから20年余り、1987（昭和62）年に、同じ番組枠で「独眼竜政宗」が放映される。自らの知恵と才覚で仙台藩62万石の礎を一代で築いた奥州の戦国武将・伊達政宗のものがたりである。このとき、いわゆる「大河バブル」が起こった。

実際、その5年前に、東北新幹線が開通していたこともあって、仙台市などに観光客が殺到した。主演の渡辺謙や桜田淳子が同市の青葉祭に参加した青葉祭は、遠来の訪問者を含めて大いに賑わった。これを契機に、各地の自治体は、大河ドラマの舞台地誘致をめざして、都市整備やオープンセット制作に励むようになった。

いままし、大河ドラマの影響を詳しく見るために、赤穂市の観光統計を取り寄せてみた。この都市は、日本の最も有名な物語の一つ、「忠臣蔵」に不可欠な舞台だからである。

そのため、1974年の「元禄太平記」以来、「峠の群像」（1982年）、「元禄繚乱」（1998年）など、何度も大河ドラマに取り上げられた。そのたびに赤穂市への観光入込客が増えている。対前年比で示すと、1974年に103%、1982年に123%、1998年には149%。最近になるほど、その影響は大きい。

最近も観光入込客数の実数は150万人前後を数えている。しかし、対前年比で149%を記録した1998年の実数が272万人でピークを飾った。してみれば現在、その数は半分近くに減少していることになる。この都市をめぐる「ものがたり」の放映の影響の大きさは否定できそうにない。

そういえば昨年、東京ディズニーリゾートの入場者数が、1983（昭和58）年の開業から30年たらずの間に累計で5億人に近づいた。むろん今なお、毎年の入場者数も2500万人前後に達している。その背景には、アトラクションの増設や更新、類まれなホスピタリティ、立地の良さなどが関与していることは否めない。しかし、何より大きな要因の一つは、そこで追体験できる「ものがたり」が多くの人々に知られていることにある。

では、テレビ放映の対象になったり、東京ディズニーリゾートのような大規模なテーマパークに恵まれなかったりする地域には、希望がないのか。そんなことはあるまい。自らの力で、新しい「ものがたり」を発信すればいいからである。

そんな試みの事例として、地域活性化支援センター（NPO法人）が2006年に始めた「恋人の聖地プロジェクト」が挙げられる。プロポーズにふさわしいロマンチックな場所を「恋人の聖地」として選定しようというのである。その数はすでに100か所あまり——そこには、非婚や未婚の男女が増える世相のなか、若い人々と地域社会に向けて「結婚」に対する明るい希望と空気の醸成を図ろうという意図も隠されている。

その一つ、福井県の梅丈岳山頂公園の「誓いの鍵」に行ってみた。若狭湾と三方五湖が見渡せる景勝地の無人販売機で400円の鍵を買い、誓いを込めて防護柵にかける。すると、

恋愛が成就するのだという。10万個を超える鍵がかけられている防護柵は一驚に値する。

と記したところで思い出すのは「おみくじ」である。神社などで、それを引いた人の多くは先ず「恋愛運」や「待ち人」の欄に目をやる。なるほど、昔から「ものがたりを触発」して人々を呼ぶ、さまざまな工夫が凝らされてきたのである。それらは皆、新たな観光を創る試みだったのだと考えてよい。

7. 漫画・アニメなどのものがたりが触発する観光

今ひとつ、紹介しておきたいのは漫画やアニメの舞台となった土地やそれに似た場所を、一種の「聖地」として「巡礼」する若者たちの、新しい観光の事例である。

たとえば美水かがみ作の人気四コマ漫画に『らき☆すた』という作品がある。角川書店の月刊ゲーム雑誌『コンプエース』に2004年から連載されているほか、アニメや小説にもなっている。

原作のタイトルは「Lucky Star (ラッキースター)」に由来するのだそうである。そのものがたりは、小柄でアニメやゲームが大好きなオタクの女子高生・泉こなたと、その友人でゆったりした性格の柊つかさ、その双子の姉でしっかり者の柊かがみ、容姿端麗で博識ながら天然系の高良みゆきの4人を中心に、彼らの周りを含めた人々の「まったりした普段の生活」を描いたもの、ということになる。

主な舞台は、柊姉妹の父が宮司を務め、柊家とその境内に住む鷹宮神社である。そうした神社の雰囲気伝える小道具として、電電公社の古い600型の黒電話が大きな役割を果たしている。

ところで、アニメ版『らき☆すた』に描かれる鷹宮神社のモデルとして、埼玉県久喜市に位置する鷲宮神社が取り上げられて注目を集めるようになった。この神社の祭神は天穗日命とその子の武夷鳥命と大己貴命としており、一説には関東地区最古の大社、お酉様の本社とされている。

とはいえ5、6年前まで、正月を中心に参拝者数は、わずか1万5000人程度であった。ところが、『らき☆すた』の雑誌連載と共に、実在の鷲宮神社が、その作品のファンによって、この作品の一種の「聖地」として認知されるようになった。結果、その数が徐々に増加し、2007年には正月三が日だけで9万人を突破。その後、テレビでのアニメの放映が始まったことで2009年には30万人を突破するに至った。

そして遂に2010年の大晦日に、『らき☆すた』で泉こなた役をこなすタレントの平野綾が鷲宮神社からの中継番組に出演し、

「初めて鷲宮神社に来ました」

とあいさつするに至り、2011年の正月三が日の参拝者数が47万人を数えた。

それだけではない。周辺の商店街が『らき☆すた』にちなむ新しい商品を開発・販売し

たり、鷲宮神社を「聖地巡礼」に訪れた若者たちが、周辺地域の清掃活動に励んだり、といった興味深い現象が引き起こされている。

それは、さまざまな「ものがたり」が、新しい観光行動を触発する事例にほかならない。こうした事例が今後、いよいよ「ものがたり観光」とそれを創り出そうとする人々の「行動」を大いに触発していくことになるのは明らかな事実であろうと思われる。

【付記】

この論文は、佛教大学 2011 年度教育職員研修の成果物である。

参考文献

- ・バード、イザベラ（著：1885）、高梨健吉（訳：1973）『日本奥地紀行』平凡社（東洋文庫）
- ・河合隼雄（2003）「物語と心理療法」『河合隼雄著作集（第2期〈7〉）物語と人間』岩波書店
- ・久米邦武・田中彰（1977）『特命全権大使米欧回覧実記（①～⑤）』岩波書店
- ・高田真治・後藤基己（訳：1969）『易経（下）』岩波書店

観光の地域産業化

李 有師*

Localization of Tourist Industries

LEE Yuuji

IT技術とパソコンの普及は旅行や観光の姿を大きく変化させた。1990年代後半から2000年代前半にかけて、それまでは旅行代理店（旅行会社）を經由してやりとりされていた多くの宿泊予約や航空チケットが、パソコン上の予約システムを介し、地域も国境も超え、個々人と直接取引されるようになった。

これらのことは旅行業界全般の雇用の姿も大きく変化させ、ひいては大学等で観光を学ぶ教育の現場にも大きな影響をもたらした。旅行商品の直接取引化、すなわち省力化が革命的に進んだことで、宿泊施設は過大な価格競争**、旅行会社はネットや通販業者によって、旅行商品という商材そのものをごっそり奪われた。さらに重要なことは、観光形態そのものが大きく変化していることだ。

しかしこのような大転換は歴史上、過去にもあった。いま必要なことは、時代の必然である変容にたじろぐことなく、必要とされている観光に誠実にアプローチすることではないか。そこでこの小論では、過去の観光のあり様を見極めつつ、今後の観光はより深く密接に地域と共に歩み、地域産業のとの係わりに依拠した観光に進化・移行するとの視点から考えを述べるものとした。

1. 変容の序章

1990年代中頃、オフィス普及を経たパソコンは各家庭に入りはじめたが、高額の通信費用から「個人」の常時利用は稀だった。ところが90年代後半から、その通信費が高速化と併せ格段に安くなり状況は一変する。個人利用が増え、その一連の動きの中で宿泊予約

*大阪千代田短期大学総合コミュニケーション学科

**筆者は平成6（1994）年から大阪初の都市型ペンションを営んでいる。その実証実験的な営業経験から、ネット予約システム出現以前の宿泊業界は「施設序列による価格統制」が業界のルールであり、「過大な価格競争」が起こり得なかったことを現認している。そもそもネット予約システムの登場以前は、リアルタイムに価格設定することそのものが告知手段の関係上、まったく不可能だった。現下の過激な価格競争とそれに伴う施設再編は、宿泊業界に激しいスクラップ&ビルドをもたらし、雇用を損ねる一因ともなっている。

や航空チケット購入等の観光ビジネスの基底ともいえるスタイルが激変した。

この頃、日立造船情報システムが重厚長大型産業の不況対策、あるいは社内ベンチャーとして、宿泊施設と個人利用者を直接結ぶ、わが国初の本格的な予約サイトシステムを立ち上げた。それが「マイトリップネット＝旅の窓口」だった。これが時代の先駆けとなり「マイトリップネット」は、見事に事業的な成功を取める。ところが成功度合いがあまりに大きかったことから本社が「ここだけ」を召し上げてしまう。子会社のベンチャーは平成12(2000)年、日立造船本社直属の100%出資会社となった。その当時の年間売上高は次のとおりである。

○マイトリップネット＝旅の窓口の売り上げ推移¹

- ・日立造船情報システムの社内ベンチャーとしての最終年、平成11(1999)年の年間売上高→61百万円
- ・日立造船本社の100%子会社となった平成12(2000)年の年間売上高→1,087百万円
- ・同時期に発表された平成13(2001)年の年間売上見込み→2,360百万円

この後、平成15(2003)年には、三木谷浩史が率いる楽天(楽天トラベル)が、当時は破格の条件といわれた323億円で「マイトリップネット＝旅の窓口」を買収する²。「買収」という形でいち早くギャランティーした楽天の時代を見る目は確かだった。

それは表1³に明らかだ。買収からわずか6年後、平成21年ベース(2009年4月～2010年3月)の取扱高において、すでに業界第5位の座を占めている。長らく業界第2位であった近畿日本ツーリストにも肉薄している。業界第1位のJTBや近畿日本ツーリストの旅行取扱高には、伝統的に法人営業や修学旅行等の教育旅行。また、イベントや様々な企画営業的数値が多く含まれているので、一般的に理解される「旅行取扱高」という点では、すでにこの業界の歴史的序列は大きく変化したと見ることができる。

表1 旅行取扱高

① JTBグループ	1兆4,172億円
② knt! 近畿日本ツーリスト	3,803億円
③ 阪急交通社	3,528億円
④ 日本旅行	3,474億円
⑤ 楽天トラベル	3,211億円
⑥ H・I・S	2,800億円
⑦ ANAセールス	2,044億円
⑧ クラブツーリズム	1,388億円
⑨ JAL ツアーズ	1,227億円
⑩ トップツアー	1,153億円

平成21年度ベース(2009年4月～2010年3月)

1. 日立造船(株)2001年9月28日付け プレスリリース資料

2. 同上 2003年9月4日付け プレスリリース資料

3. 日本経済新聞社(2010)『日経業界地図2011年版』86-87頁を基に作成

これらを勘案した上でさらに注目すべきは、この平成 21 年度ベースの業界全体の規模は 5.4 兆円で、これは昭和 63 (1988) 年と同等程度に過ぎないということだ。同様に、業界第 1 位の JTB が初の 1 兆円超えを記録したのは、すでに昭和 59 (1984) 年⁴にまで遡るということだ。

さらに注目すべきは、ベストテン企業の過半 (③⑤⑥⑦⑧⑨) は、これまでの伝統的な代理店型の旅行会社とは違い、ネットや通販型ビジネスに重きをおいた「業態」ということだ。これによれば、伝統的に成立してきた「売り上げ規模と雇用の比例関係」は、すでに終焉したとみることができる。これらの業態は旅行会社というよりも「ネット・通販業者」により近く、旅行の専門知識を持った社員の必要性が相対的に低下したからだ。

これら業態の進化は、個人に係る旅行と観光に大きな形態変化をもたらしたばかりではなく、この間、旅行業界に著しく激しい雇用収縮 (リストラを含む大規模な人員整理) をもたらした。

このような動きは国内に限定されたものではなかった。海外系の宿泊予約サイト⁵は、「日本の垣根」をものともせず、海外から日本への旅客を急増させた。その結果として「需要サイドと供給サイドの直接的なやり取り」が格段に進んだ。これまでは「海外と日本の垣根」が様々に存在したので、海外旅客と国内の宿泊施設とを結んだ一定規模以上のビジネスには、旅行会社の介在 (代理店ビジネス) がなければ事実上不可能とされてきた。ところが、これらの予約サイトの出現は「日本の垣根」をあっさり飛び越えた。

これによって、海外と日本の「垣根」ごとに存在した様々な旅行代理店等のビジネス機会が、あらゆる場面でスルーされ、結果的に旅行会社とそれに関係する様々な雇用の場がここでも消滅した。すなわち旅行業界のあらゆる場面で雇用収縮が進んだわけだ。

このことは、観光関連大学等の学びにも影響を与えている。「伝統的観光ビジネスの雇用収縮＝観光関連大学等の必然性も収縮」と捉えられているからだ。

だがそれは違う。専門の旅行者を介さず行われる活発な「情報やりとりの混然一体化」が、いままで考えられていなかった現象を生み、新たな観光的ニーズを生み、社会的な要請を萌芽させつつあるからだ。

4. 白幡洋三郎 (1996) 『旅行ノススメ』中公新書 47 頁

5. 筆者が経営する都市型ペンションでも、平成 15 (2003) 年にアイルランド発祥のインディーズ系宿泊予約サイト hostelworld.com にオンラインした。予約サイトの日本マネジャー K 氏は、東京・本郷にある老舗旅館の経営者でもある。K 氏によれば、このインディーズ系宿泊予約サイトの 2010 年度の取扱実績 (日本全土へのインバウンド) は、宿泊実数ベースで約 108,000 泊に達したとのことだ。しかし、楽天に買収される以前の「旅の窓口」や、この「ホステルワールド」などがインディーズ系の牧歌的な強みを発揮できた第一世代は既に過去のものようだ。すでにエクスペディアや Hotels.com などのメジャー大手が活躍する第二世代に突入している。だが早くも、予約サイトに慣れた宿泊施設や利用者が、予約サイトさえもスルーし「直接やりとりする現象」が多くなりつつある。これらの動きは、すでに第三世代化と呼ぶに相応しい新しい観光シーンも勃興させつつある。

2. 伝統と変容

わが国の旅行業の先駆けとして、お伊勢参りに登場する職業、御師^{おし}がある。白幡洋三郎は「御師とは、もと御祈師とか師職とも呼ばれたというのが、はじめ伊勢神宮での祈願を、参詣人に代わって行なう神主のことであった。それがのちには、参詣人を伊勢まで案内し、そのための道中の宿の確保や食事の手配までを一手に引き受ける人びとをさすようになってゆく」と記し、御師は「わが国の旅行業の先駆け」と紹介した⁶。

神崎宣武は、安永六年（1777）時の顧客台帳（御師の手元にある檀家帳による信者数）の存在を示す。それによれば当時の日本全体の推計世帯数の7～8割に相当する約419万戸が「台帳化」されていたという。御師の数も「江戸中期には600家から700家ぐらいの御師がいた、と類推できる」とある⁷。驚くべき「旅行者」の数だ。

宮本常一は御師による旅館経営にも目を向け、その総数を享保九年（1724）時点で856軒と推計し、「まったく驚嘆のほかはない」という言葉を残した⁸。

御師は、顧客情報の一元化や企画・営業、道中の一切、旅館経営（立派な食事も供したので周辺産業分野への裾野も広がった）など、旅行の企画、旅館の経営などいわば「川上から川下」まで、連続一体に経営した総合旅行会社だったともいえるが、このような業態は21世紀に存在しない。ビジネスの形は時代と共に変容する。それはすなわち「旅や旅行のカタチも変容する」ということを意味している。

このように見ると、わが国の旅や旅行の変容は概ね次のように解釈できる。

① 18～19世紀モデル

御師に代表される旅行受け入れの仕組みと、「お伊勢参り」という参詣による旅行が形づくられる。「庶民の生活の中に旅が形態化され位置づけられた」点で大きな意味がある。また、歡樂的な要素を旅の中にごく自然に盛り込む日本ならではの旅行様式も確立された。

② 20世紀モデル

前世紀モデルを継承する形で旅行文明やその産業が隆盛した。日本では見知った人たちとの団体旅行や企業単位の慰安旅行などが代表的な旅行形態として発展した。キーワードは「通過・発散・金銭消費・均質サービス」。これに対応するため、旅行会社の規模が大きくなり、受け入れ側の宿泊施設なども大型化した。

③ 次世代モデル予測

世界遺産登録に関連するような大規模観光の一方で、旅行ニーズは個別細分化する。

6. 前掲4, 14-15頁

7. 神崎宣武（1990）『観光人類学への旅』河出書房新社 184頁

8. 宮本常一（1987）『日本の宿』八坂書房 134頁

IT 社会の進化と定着が需要側と供給側を限りなく直接的に結び、地域個々の産業資源を観光的な視点から結び楽しむスタイルが定着する。国内外の垣根が最小化「旅行の直接取引」が進み、地域・地方間で魅力の差異化が起こる。それぞれの文化が主役に躍り出て「地域産業との係わりに依拠した観光」が勃興する。

3. 均質の呪縛から解き放たれたニッポン

田中角栄の日本列島改造論は昭和 47 (1972) 年に出版された。その冒頭で「『都市政策大綱』成る」の項⁹があり、そこでは全般を通して均質な都市化によってこそ「安心して暮らせる住みよい豊かな日本」が成る、とある。

終戦から四半世紀余、日本の戦後復興がほぼ果たされたこの時期、「次世代の繁栄は」「均質な都市化で」「ふるさとの過疎化も均質な都市化で回避が可能」と説いた。しかしそこには、余暇生活に正対した内容がまったく見当たらない。

同じ年、フランスの「余暇文明に向かって」が日本でも出版された。「余暇とは、個人が職業や家庭、社会から課せられた義務から解放されたときに、休息のため、気晴らしのため、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会参加、自由な創造力の発揮のために、まったく随意に行う活動の総体である」¹⁰と概念規定し、バカンス＝観光旅行を「バカンスは、その時間の長さ与人々の期待を刺激する点で、最も重要な余暇活動」¹¹と捉えた。

この直後、オイルショックが発生し「列島改造」の熱は過ぎ去った、かに見えた。しかし、土地投機の熱だけを残し「観光らしきもの」が、猛烈なブームを巻き起こした。総合保養地域整備法（いわゆるリゾート法、昭和 62 年・1987 制定）を背景にしたリゾートブームだった。

それは、列島改造論と同根の「均質」だけをもたらした。地域ごとの「ものがたり」を葬り去るその「均質」とは、ゴルフ・スキー・マリン施設・リゾートマンション・別荘分譲地・大型宿泊施設など、北海道から沖縄までを同種の巨大なリゾート計画で埋め尽くした¹²。これらのいくつかは事業化を見たが総じて経営は芳しくなく、二東三文の転売や閉鎖に追い込まれたケースが多い。この少なくない数が、いまでも日本の各地で「均質」の無残さをさらし、残骸をさらしている。

列島改造論やリゾートブームで模倣的に述べられた観光は、東京中心の日本が集約的に繁栄を担保するから、生産性の低い地方は「リゾートや観光で均質になりなさい」ということに等しいものだった。

他方、「余暇文明」で指摘されている観光は、人生における「余暇」という時間構成のあり方や意味づけそのものに多くの紙数を割く。余暇と労働はその存在において優劣の決すべき 2 項対立の時間概念ではなく、人間にとってなくてはならないコインの裏表のような関係、「どちらか一方でも欠けると人格は成立し得ない」と規定しているように解釈

9. 田中角栄 (1972) 『日本列島改造論』日刊工業新聞社 2 頁

10. Joffre, Dumazedier. (1972) 中島巖・訳『余暇文明へ向かって』東京創元社 19 頁

11. 同上 138 頁

12. 日経リゾート (1988) 『特別編集版 1～3 号』日経 BP 社 全版全編でリゾートに狂奔する当時の日本列島が確認できる

できる。

このような立場に立てば、大都市に従属するだけの通過・発散型の観光や数の規模だけを追い求めることが観光の姿ではない¹³。高度成長を終え少子高齢社会を迎えた日本では、むしろ文化や地域産業の違いに畏敬しつつ、それぞれを楽しむことができる地域ごとの観光に注目すべきである。

加藤晃規は、リゾートブームが崩壊した後もなおバブル熱の残り香が漂う時期、唯一無二の場所づくりには快適性よりも、そこにもともと存在する場所の来歴「地霊」、その地霊を情報発信する手立てとしての「アート性（オンリーワンのものづくり）」、これらの評価やさらなる価値化のために「よそ者＝ネオノマド（新遊動民）」の受け入れを説いた¹⁴。

地霊・アート・ネオノマドの場所づくり概念は、工業都市化一辺倒でやってきた当時の日本（その象徴としての都市・大阪）で、次の一手を探るために提言された次世代の都市モデルであったが、それは、いまの「ジャパंकール」と称される小規模であっても独創的なモノづくりや食、それらが織りなす「日本の地域と暮らし」に連なる。

高田公理は近年、日本生まれのあれこれが、世界中で着実に人気を高めていると指摘する。それらは、海外有名ブランドのデザインにまで生かされ、もっぱら保守的であった国々の食にまで影響をもたらしていると指摘する。

さらに、「背景には、日本人が豊かな自然の恵みに生かされてきたという事実」と、「その自然は、しかし地震、台風、洪水、大雪など、世界的にまれな激しい災害をもたらしもする。それらに巧みに対応するには、単純な原理は役に立たない。柔軟にならざるをえないのだ」¹⁵と、日本人気の源流を喝破した。

4. 職業と観光学

地霊・アート・ネオノマドの場所づくり概念と共に、観光分野でのこのようなムーブメントは、佐藤誠の論に詳しい。ここでは産業がハードからソフトへ、さらに共生システムの新しい構築のもとにライフウェア化すると規定し、近い将来の観光のネオツーリズム化を予言している¹⁶。

大学等で観光を学ぶ指針にと、石森秀三が中心となつてとりまとめた最新の報告書¹⁷によれば、観光の学びと観光産業分野への就労マッチングはたやすくはない。

なぜなら、観光における日本人気に焦点をあてた展望や挑戦を観光学に結びつけるほど、未来の観光「地域ごとの観光」の本質には近づくが、逆に、いま目の前にある観光産業分野の就職機会からは遠ざかる。すぐ目の前にある一団の職業として「地域ごとの観光」は

13. 李 有師 (2010) 朝日新聞「わたしの視点」2010. 2.25 から『ニッポン観光——瀬戸内海の多島美を生かせ』

14. 加藤晃規 (1993) 『De. 大阪—地霊・アート・ノマドの都市』KBI 出版 35 頁

15. 高田公理 (2008) 『につぼんの知恵』講談社現代新書 6 頁

16. 佐藤誠 (2008) 「大交流時代における観光創造」石森修三・編から『美しい村とネオツーリズム』北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院

17. 北海道大学・観光関連大学等教育評価委員会 (2011) 産学連携による実践型人材育成事業—専門人材の基盤的教育推進プログラム—「産業界と連携した観光関連大学等の職業教育の評価・認定システム構築プロジェクト報告書」

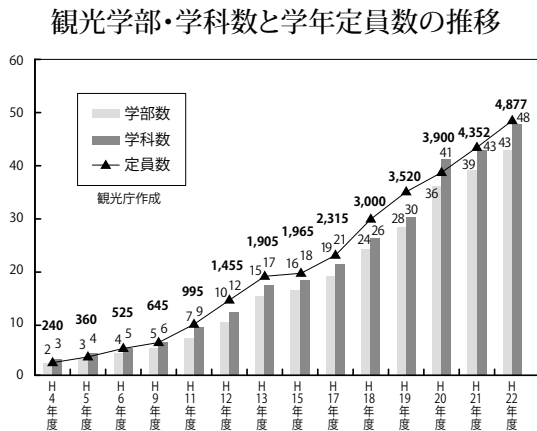
見通し辛いからだ。他方、明快な就職規範に基づいた専修学校では、ホテル、航空、鉄道、旅行会社などの従前の大きくくりを、さらに個々細分化した「専門」とし、いま目の前にある「就職率の高さ」に力を注いでいる。この明快さは、観光分野の新規採用の絶対量の激減という事実はさておき、「就職分野」という一点では何より分かりやすい。

表2¹⁸によれば、観光系の学部学科を有する大学はこの10年間で格段に増えた。しかし、「いまこの時」の職業に直結した専修学校と大学との役割分担が混迷するほど、中長期的には観光分野全般の価値は崩壊する。

専修学校と大学が競合して、雇用収縮が進む従前型観光産業分野だけに若者の目が向いてしまうと、結果として新しく必要とされている「地域の自立に寄与する観光」という、これからの分野に若者の目が向かず、次世代の観光にも、若者にも、大学の学びにも未来が見出せなくなる。

大学の観光教育は、いまこそ「地域産業との係わりに依拠した観光」に目を向けるべき時だ。

表2 観光学部・学科数と学年定員数の推移



5. 観光の地域産業化へのアプローチ

地域の人々の生き方に注目した「ものがたり観光行動」の視点から、現地を訪ね、旅する連載が2009年3月以来、毎日新聞「旅・まち・発見」で継続されている。筆者はこの企画の主要部分を構成し、これまで北はアイヌの地、南は沖縄県の伊是名島まで日本の各地を旅し、歩いている。

そのひとつに大分県豊後大野市がある¹⁹。ここに「清川ふるさと物産館 夢市場」という有限会社がある。見た目は、いまや日本のどこにでもある「道の駅」の運営会社のように見えるのだが、その実態は佐藤誠が指摘した、共生システムの新しい構築もとのライ

18. 大黒伊勢夫 (2010) ものがたり観光行動学会 学会報第1号 『ものがたり観光行動の地平』

19. 李有師 (2010) 毎日新聞「旅・まち・発見」2011.5.16 から『なごみの日本美に一票! (大分県豊後大野市)』

フウェア化……「地域産業の係わりに依拠した観光」が可能な中身を紡ぎ出しつつある地域経営会社に近い。

ここで売買されるほぼすべてのものが、この地域の田畑で収穫されている。それは「清川産直友の会」会員、約230名の地域生活者＝生産者の手になるものだ。さらに重要なことは、この有限会社が厳格な作付け管理と企画、さらに販売の現場まで一連を一括的に担っていることだ。

全国の道の駅を注意深く観察すると、ラベルを張り替えただけの「どこにでもある商品」で占められている場合も珍しくない。このような場合、その経営に地域の主体性はなく、地域産業との係わりに依拠した観光は不可能だ。

ところが、この「清川ふるさと物産館 夢市場」では、20年を超える事業実績から導き出された、生販一体の地域経営システムが確立されつつある。ここの経営責任者、三浦俊荘によれば「今後、10～20億円程度の年間売り上げは夢ではないが、そこに向け必要なことは、着実な生産戦略と誠実な観光戦略がマッチングした柔軟な経営だ」という。しかし一方で「市全体が深刻な高齢化問題もかかえているので、あまり悠長に構えるわけにもいかない」というのが本音のようだ。

誠実な観光戦略とは、「売れるものならラベルを張り替えただけの商品でも売る。数字の規模をとにかく確保する」といった20世紀モデルの観光との決別であり、地域自らの生産主体性の中に発祥する雇用を伴う「地域産業との係わりに依拠した観光」へのアプローチということに他ならない。これは三浦が先頭に立つ地域経営会社と地域行政（豊後大野市）の共通認識で、すなわち「地域産業との係わりに依拠した観光」への道程である。これらから、いまこの地域に必要とされている観光モデルが次のようなものであることが理解できる。

○ 地域産業の係わりに依拠した観光「豊後大野市モデル」

(1) 前提の共有

- ① 現状を「維持する」という考え方だけでは、すぐ目の前の高齢化に対応できなくなる。守りの姿勢だけでは「現状」そのものが破たんする危険性が極めて高くなっている。
- ② これまで確立してきた体制や方針は厳守し尊重しつつ、一方で地域だけで完結してしまう経営には固執しない。なぜなら「経営の固執」は、人材の枯渇を生み、既得権益化もたらし、結果として人口減少をさらに悪化させてしまうからだ。
- ③ 経営の斬新性は常に必要だ。そのキーワードのひとつに次世代モデルの観光と教育を位置付ける。地域を挙げたインターンシップ的試みから「地域産業

の係わりに依拠した観光」を包括的に構想する。悠々と急がねばならない。

(2) 豊後大野市の未来を語る「観光像」

- ① 清川ふるさと物産館 夢市場に見られるような、地域オリジナルの農産物生産とそれに伴う管理・企画・商品化・販売等々を一連し、価値を高める行為の総和に出現する「観光」を目指す。ここでは、通過型の観光や単なる集客とは一線を画す。
- ② この共通認識と共に、地域行政を含む様々なセクターとの協働化を具体化する。それらは当該の魅力的な自然や文化的な価値、地域オリジナルの生産行為が有機的に結ばれ、一同が混然一体となって享受・確認できる仕組みを持ち、外に開かれている姿こそを「観光」とする。
- ③ 地域の教育課程として、これらの行為と結ばれたカリキュラムを設ける。また、観光交流の一環として、地域ぐるみでインターンシップ生を受け入れることのできる、「まちぐるみインターンシップ交流制度」等を念頭する。

まちぐるみインターンシップ交流制度とは、地域産業資源や自然環境資源、地域の教育インフラやその他活動拠点を「観光」を切り口として多元的に結び、それらを地域の教育拠点（廃校跡などを再生利用し簡素で清潔な宿泊機能を付帯させる）で、自律した運用と一定期間のカリキュラムと共に、各地の大学・教育機関等にセールスして、学生や若者を受け入れる試みである。この「まちぐるみインターンシップ交流制度」によって、「地域産業に依拠した観光」が発祥し、ひいては地域産業に貢献できる新規定住者獲得への道も開かれる。

2011年7月現在、地域と筆者はこのような考えの緩やかな共有を行った。これに大阪千代田短期大学で観光を学ぶ学生が賛同、インターンシップ生が豊後大野市に向かうことになった(図1)²⁰。期間は2011年夏季休業中の2週間。農業を主体にした地域経営会社、地域行政、それに次世代型の観光を学ぶインターンシップ生が混然一体になる構図から、観光の地域産業化が萌芽して地域と若者の双方に未来が拓けゆくことを願い、この小論の結びとする。



図1 まちぐるみインターンシップ交流制度への試行

20. 『まちぐるみインターンシップ交流制度』への試行。地域の理解を得て、大阪千代田短期大学とその学生(写真中央、女子)が実験的に試みた。豊後大野市に集う多くの若者との交流に未来が見え、受け入れに資する様々な地域課題も見通せた。

関西における 観光振興の課題と提言 — 関西意識と府県ブランドの共存と対立 —

山中鹿次*

Coexistence and Opposition in Promoting Kansai Tourism:
The Problems and a Proposal for Regional Consciousness and Prefecture Place Branding

YAMANAKA Shikatsugu

関西では世界遺産にも登録される寺、神社や霊場があり、日本最大の湖である琵琶湖や有馬など有名な温泉もあり、観光資源に富んでいる。

関西の活性化のため2010年に発足した関西広域連合でも、観光振興が重要視されている。しかし関西では、京都、奈良といった府県単位のブランド力も高い。

関西という意識での観光振興策を紹介しながら、府県単位のブランド力を活かしつつ、関西という広域での観光連携の方策を提言する。

1 はじめに

2010年12月に関西の府県が加入して、関西広域連合が発足した。関西広域連合では関西の府県が共同して、防災などの業務の連携と共に、観光振興を重要な連携のテーマにあげている。

しかしその一方で、2010年に奈良県で平城遷都1300年事業が開催され、引き続き2012年からは、記紀万葉プロジェクトを開催する。この奈良県が2011年現在、荒井正吾知事の方針で関西広域連合に未加入である。

この背景には関東・東京に比べ、関西の中での大阪が抜け出ることを歓迎しない傾向と、奈良大和路、紀州みかんなど府県ブランドの強さがあると思われる。

本論では広域連合設立以前からの観光振興での関西として共通の取り組みと府県独自の取り組みに触れながら、今後の関西の観光振興について提言をするものである。

2 関西広域意識の観光振興

古くから西国三十三ヵ所の寺院が、一つが岐阜県に分布する以外は関西の範囲に分布する。これは観光振興を意識したものではなく、東国に対する西国：関西意識の範囲の中に

*ランニングサポート（任意団体）

寺が分布している一例であるが、関西意識を活用した観光振興の好例として、歴史街道がある。

歴史街道計画は、堺屋太一氏らの提唱で、1991年から開始された。京都と奈良、伊勢など古くから著名な歴史遺産が分布する地域を結びルートを策定し、歴史街道倶楽部に入入するとツアー割り引き、施設の入場割り引きの特典がある。

当時の河合隼雄文化庁長官の発表した「関西元気文化圏構想」も歴史遺産を活かした観光振興策として、年々盛況になっている。そこでは関西文化の日を11月に制定し、この期間は関西の博物館入場が無料となる対応を行った（但し館により博物館の無料入場できる日は異なる）。これに参加した関西の博物館の入場者は2005年に約13万人、2010年には約43万人に達し、年々盛況を呈してきている。

さらに2004年には和歌山、奈良、三重の三県に跨る高野山、熊野古道など紀伊山地の世界遺産登録が実現した。この三県が協力して世界遺産登録三県協議会を設立し、参詣道を訪ねる人に守ってもらうルールを策定している。

また異なる府県にある博物館で共通する企画展を行う取り組みがたとえば滋賀と大阪とで実施されている。2009年から滋賀県の安土城考古博物館と大阪府立弥生文化博物館がそれぞれの企画展を相互に関連づけて開催している。2009年では、安土城考古博物館でまず弥生関係建物の企画展を春に開催し、夏に大阪府立弥生文化博物館で弥生建物にちなんだ企画展を関連し、相互に見学することにより弥生時代の建物への理解が進むことを意識している。

さらに2010年12月に発足した関西広域連合では、実施事務として広域・観光文化振興計画を策定しているが、主な取り組みは以下ようになる。

- ①「関西観光・文化振興計画」の策定
- ②広域観光ルートの設定
- ③「関西地域限定通訳案内士（仮称）」の創設
- ④「通訳案内士」【全国】の登録等
- ⑤海外観光プロモーションの実施
- ⑥関西全域を対象とする観光統計調査
- ⑦関西全域を対象とする観光案内表示の基準統一

たとえば①の「関西観光・文化振興計画」を例にすると関西が一丸となって戦略的取り組みべき重点分野として、外国人観光旅行の容易化計画を策定するとされている。また通訳について府県を越えて関西全般の案内が出来るようにして、その登録を広域連合が一元的に管理し、効率的な登録事務及び運用を目指す内容になっている。日本経済と文化の東京集中を抑止するためにも、上記目的の達成、円滑化が求められる。

3 関西における府県ブランドの問題、共存と対立

関西では、府県意識が強く、足の引っ張り合いとでも言うべき状態を呈する場合も多い。関東地方であれば東京というイメージが関東全体を覆う威力を持っている。

千葉県にある成田空港は新東京国際空港と呼ばれ、千葉県浦安市に所在しても東京デイズニーランドと呼ばれる。また関東地方全域に送電していても、東京電力のように東京という地名の単位は絶対的な存在に近い。

だが関西で大阪が比較的経済力や人口の比率が高いとしても、大阪の泉州沖に造られた空港は関西新空港であり、大阪新空港ではない。また東京デイズニーランドのような形で、大阪と名がつく施設が周辺の京都や奈良に分布することはない。

これは、大阪以外に京都、奈良に都が置かれた時代があり、滋賀も天智天皇の時代に宮が置かれ、日本最大の琵琶湖があるといったブランドが影響している。兵庫は平清盛時代の福原宮や世界遺産の姫路城がある。和歌山も世界遺産の高野・熊野がある。その上、元の国名で紀州みかん、近江牛という形でのブランドイメージの特産品がある。そのことが関西での観光の難しさをもたらしていると考えられる。

関西広域連合が観光での連携を進める中で、大阪府は大阪の街全体を街ごと観光素材とする大阪ミュージアム構想を2008年から実施している。これを具体的に示すと大阪のまち全体を「ミュージアム」に見立て、魅力的な地域資源を発見、再発見する試みで、府民から推薦の登録物は建物、祭り、町並み、自然など、2010年9月現在1166件に達している。さらに平城遷都1300年事業を363万人の入場者、奈良県内だけで970億円の経済波及効果をもたらした奈良県が、ポスト1300年事業として、2012年から古事記編纂1300年事業として、記紀万葉プロジェクトを開始するなど、奈良県独自の観光振興を重視している。

記紀万葉プロジェクトでは以下の三点が目標に掲げられている。

- ① 奈良県が歴史情報の発信のしかたとその味わい方の提案に関するリーダー的存在になる。
- ② 歴史素材の多角的な紹介により奈良県の魅力の再発見、地域の誇りの醸成につなげる。
- ③ 奈良県への誘客を促進し顧客満足度を高める。

2010年の平城遷都1300年事業では、平城京のある県内北部の奈良市が中心になっていたが、記紀の舞台である明日香村など県内の奈良市より南の地域の歴史遺産をより活用を重視しているのが特徴である。

奈良県が今の所、関西広域連合に加入しないことは他の要因もあるとしても関西としての観光プロジェクトが重視されると、記紀万葉プロジェクトなどが色あせたものになる危険性を憂慮しているのかもしれない。

また東京マラソン以後、マラソン大会の開催が観光：地域活性化と結びつき各地で活発

になっている。関西の場合は2011年10月30日に大阪マラソンが開催されるが、昨年既に奈良マラソンが開始され、大阪にやや遅れて11月には神戸マラソン、来年3月には京都マラソンが開催される。

東京周辺の都市で開催しても、参加者の観光の行き先は東京に流れる。東京に負けたくないような意識も出ないが、このように関西の場合、地域活性・観光の目玉行事を大阪の一人占めにしたくない強烈な意地が表面化する。関西での観光連携を考える時には、府県のブランド力とプライドは軽視してはいけないと言える。

4 関西の観光振興での課題と提言

そこで関西での既存の府県のブランド力とプライドを上手に活かしつつ、一方で関西広域での観光振興は図るべきであると考えます。

海外からの旅行者の今後の観光ルートとして、関西空港から京都に向かい東京へ行く、あるいはその逆の流れを食い止める趣旨から、関空から高野山を経て、建設中の京奈和自転車道を経由し、奈良から京都、琵琶湖周遊から大阪へ、神戸から船で関西空港へと関西をぐるりと回るツアーの設定と誘導はどうか。

複数の府県に跨る河川を活用し、たとえば吉野の桜見物と吉野川を川下りして、紀ノ川に名前が変わる和歌山県橋本に向かい、そこから高野山に向かうツアーなど。同様の試みは淀川や大和川で設定できる。

さらに西国三十三ヵ所や四国八十八ヵ所のようなルートを、関西広域連合で設定してはどうか。温泉でまず人気投票と有識者で候補が少なかった府県の候補を調整の上で、八十八を設定。博物館、遺跡、渓谷など様々な八十八を設定するのである。これらでは朱印帳を作りそのページの紙の色を府県と関連の深い色とする。奈良なら山の緑色、滋賀は琵琶湖の水の色などとし、府県のブランド力とオール関西での観光連携を両立させるのである。

現在、京都では京都検定、奈良では奈良まほろば検定、大阪ではなにわなんでも大阪検定が実施されている。観光や歴史についての知識を府県単位で問うことは今後も続けていけばよいが、この検定に複数合格したら関西広域連合から「関西マスター」の称号を与えたり、関西広域連合でこれらを総合した関西検定を実施し、その問題を訪ねる観光コースを設定することも考えられる。

関西同士の意地の張り合いを生んでいる府県ブランドと、関西として一体になりうる観光振興を上記のような方法で、図っていくべきだろう。

そして、関西広域連合やJR西日本、阪急電鉄など公共交通機関と共催で、観光関連学部・学科を持つ大学、学会の企画：運営で『関西観光サミット』（仮称）を開催してみたらどうか。専門家と観光業者、関連NPO及び関心を持つ一般市民が参加して、関西の一体感を高め

る観光と、府県単位のブランド力を活かした観光について、提言、模索していくべきではないだろうか。

だが上記のようなアイデアを実施する上で、関西では九州での西日本新聞、中部地方の中日新聞のような関西一体を販路とする地方新聞がないため、報道や広報活動が進みにくいことも予想される。

そこで関西文化の日の前後の期間に『関西観光サミット』を設定することで、広く関西の観光振興への関心を高め、全国紙、地方紙を含めた、新聞及びテレビでの関西での観光の課題報道を高める工夫や、京奈和自動車道完成を契機とした記念事業で、観光ルート提案を一般公募を行うことで広く関心を高める。

また2014年が大阪冬の陣400年記念にあたるため、関西一円のお城と古戦場が400年事業に協賛することなども、上記の提案での課題克服と効果を高めるために有効ではないだろうか。

関西という大きな枠組みでの観光振興を意識し、その一方で観光ルートでの拠点として今の府県の活用がより図られることが望まれる。

参考文献

- 関西広域機構 (2010) 『www.kouiki-kansai.jp』
- 関西元気文化圏推進協議会 (2004) 『www.bunkaryoku.bunka.go.jp/kansaitorikumi.html』
- 奈良県ホームページ (2011) 『www.pref.nara.jp』
- 大阪ミュージアム構想 (2008) 『www.osaka-museum.jp』
- 滋賀報知新聞 (2009) 15324号 『滋賀・大阪博物館連携企画 大型建物の弥生都市』
- 歴史街道推進協議会 (1991) 『<http://www.rekishikaido.gr.jp>』
- 世界遺産登録三県協議会 (2004) 『<http://www.pref.wakaama.lg.jp/prefg/500700/3kenkyougikai/>』

最新の『NHK意識調査』 から読み取れる、 若者のアニメ聖地巡礼行動

奥野圭太郎*

Understanding Japanese Youth Pilgrimages to Sacred Places in Anime:
Observations from NHK Public Surveys

OKUNO Keitaro

アニメファンたちの観光行動の実例の一つとして、いわゆる「アニメ聖地巡礼」と言われる行動をテーマに、これを観光社会学の観点からとりあげたい。いわゆる「アニメ聖地」の定義としては、「アニメ作品のロケ地またはその作品・作者に関する土地で、且つファンによってその価値が認められている場所のこと」（山村，2008）などとされ、拡大解釈などにより、「アニメやマンガに登場した場面をアニメファンが巡る」のが「アニメ聖地巡礼」とされている。しかしながら、「聖地」という言葉だけでも、文学、社会学、宗教学のそれぞれの事典を見ても様々な定義、解釈がなされており、一概に述べることはできない。ただ、「聖地は場所を移動しない」（植島，2000）という点は共通しており、現に「アニメ聖地」においても核となる場所は、既存の、それも「由緒正しき」神社であることが多々ある。例えば、埼玉県旧鷲宮町（現幸手市）の鷲宮神社（アニメ『らき☆すた』（美水かがみ原作））であったり、長野県の諏訪大社（ゲーム『東方風神録』（ZUN 原作））であったりする。

巡礼者は、「痛絵馬」というものを奉納することがある。これは「痛い」と「絵馬」が組み合わさって造られた語で、「アニメやマンガのキャラクターを描いた絵馬」のことだ。美少女などのアニメキャラクターを普通の人が見て、どこか「痛々しい」という感情になるのに由来し、ファンやオタクたちが自虐的に「痛〜」と名づけたものだ（他の例としては「痛車」など）。この「痛絵馬」見たさに巡礼するケースもよく見かけられており、観光行動（とりわけリピーター）を誘発するトリガーとなっている。このような絵馬は、時に「神聖な場所には場違い」と非難されることもあるが、本来絵馬というのは、江戸時代の算額や鯰絵馬のように、自由な創作活動を奉納するものであったという伝統を理由に、受け入れ、また歓迎する神社もある。

* 関西大学大学院社会学研究科

さて、神社などの「聖地」や「痛絵馬」を核とする、いわゆる今どきの「聖地巡礼」の宗教性を探るために、NHKが35年間にわたって実施してきた意識調査の結果を参照してみよう（『現代日本人の意識構造〔第七版〕』（NHK放送文化研究所，2010）の四章五節「信仰・信心～『宗教的なもの』が増加」、四章六節「宗教的行動～現世利益が中心」）。

五節では、若者層、および中年層で、お守り、御札を買い求める人が増えているとされ、六節では、確かにそうなのだが、かといって「身近ににおいていても信じているわけではない」と論じている。一言でいえばこれは、「宗教の『ライトユーザー』」が増えた、ということなのだろう。あるいは、「カミサマのような『聖なるもの』との距離が以前より近づいた」とも考えられなくもない。この場合、近づいたのは、もちろん「『人』側からの歩み寄り」もあるだろうが、「『聖なるもの』の側が近づいた」、あるいは「その両方」、とも考えられる。ここで言う『聖なるもの』には「神社」も含まれるであろうし、とうぜん「絵馬」もお守り、御札の延長線上にあるものと捉えることができる。先に述べた「神社」がアニメファンという若者を受け入れ、「痛絵馬」を奉納物として許容するという風潮も、両者からの歩み寄りとも見て取れる。

一方、アニメファンの側も、アニメ作品に宗教施設である「神社」が描かれることに、宗教論議を持ち込むことはなく、したがって反発もしない。そして興味深いことに、聖地が「寺院」であることは不思議と少ない。ゲーム、アニメで思い出せる寺院は、『ああっ女神様っ』（藤島康介原作）の「他力本願寺」と、『東方星蓮船』（ZUN原作）の「命蓮寺」ぐらいだろうか。この点については今後、さらに検討していこうと思う。なお、宗教系（伝統、新興ともに）の場合、放送倫理規定によりアニメとしてテレビ放送はできないことになっている（映画やネット配信、販売は可）。にもかかわらず、度々登場しているというのは、放送する側の人間においても、「神社」を「宗教」施設としてはあまり認識していないのではないか。このことから、神社の出てくるアニメのファンたちで、実際にその神社を「巡礼」してみようとする層を、「宗教の『ライトユーザー』」とみなすのは、可能ではないだろうか。

では「神社」という宗教施設に、今の若者の多くが忌避感を抱かなくなったことを、どう解釈すべきだろうか。今回のデータからの分析結果までは出ていないので断定はできないが、国家神道下による戦争経験および、戦後の苦しい経験をした層が減少し、神社を「そこにあるもの」として受容し、神道を別に取り立てて忌避するほどのものではないとみなす若年層が増加した、と考えるのが自然だろう。そして神道は、本当は国家神道系と民間信仰系に分かれているのだが、こうした微妙な問題についても、もはや十分に理解されてはいない。

神社に対し、「無関心」（または「忌避」）から「親しみ」へと、世代進行にしたがって変化してきている流れが、確かにある。偶然だが、かつての国家神道のトップであった

「天皇」に対する感情を問うたNHK意識調査の質問も、選択肢には「無関心」と「好感」の二つがあるのみだった。「『好き』の反対は『嫌い』ではなく『無関心』だ」（『キノの旅』時雨沢恵一作）というなら、神社や神道は、戦争直後の「無関心」、または「忌避されるべきもの」から、今日では「好感や興味を持ってかまわないもの」へと移り変わってきていると見ることができよう。こう考えると、アニメ聖地巡礼というテーマは、思いのほか、現代社会を読み解くうえで有効なのぞき穴なのかもしれない。

参考文献

- ・ドリルプロジェクト編（2010）『アニメ&コミック聖地巡礼 NAVI』飛鳥新社
- ・柿崎俊道（2005）『聖地巡礼 アニメ・マンガ12ヶ所めぐり』キルタイムコミュニケーション
- ・NHK放送文化研究所（2010）『現代日本人の意識構造〔第七版〕』NHK出版
- ・時雨沢恵一（2000）『キノの旅—The Beautiful World』メディアワークス
- ・植島啓司（2000）『聖地の想像力—なぜ人は聖地をめざすのか』集英社
- ・ジョン・アーリ（Urry J.）（1995）『観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局
- ・山村高淑（2008）『アニメ聖地の成立とその展開に関する研究：アニメ作品「らき☆すた」による埼玉県鷲宮町の旅客誘致に関する一考察』国際広報メディア・観光学ジャーナル

編集規程および執筆要領について 概要

原稿受付は毎年 7/1 ～ 7/31，データ入稿に限る

ものがたり観光行動学会誌は、毎年7月末に原稿を締め切り、10月に1巻1号を発行する。本誌に論文等を掲載できる者は、編集委員会が特に依頼する場合を除き、共同執筆の場合を含め個人会員名で発表する者に限る。その主な内容を以下に示す。

掲載する内容

1. 大会関係論文（依頼）
2. 研究論文（投稿）
3. 研究ノート（投稿）
4. エッセー（投稿）
5. 文献・図書（投稿）

査読の有無等

本学会編集委員会が別途定めた査読要領に基づき、掲載の可否を審査する。これらの詳細は、本学会ホームページ <http://narrative-tourism.org/> で公開する。

なお、規程・要領は学会誌の改善目的のために軽微な修正が加えられる場合がある。この場合、毎年11月末迄に上記のホームページ上に修正箇所を明記して公開する。

編集後記

「やっとのことで発行できた」それが正直な感想である。この国の魅力はいま、あまりにも激烈で人智を超えた状況の中にもまれている。今年3月11日以来の、この現実を前にして、「ものがたり」や「観光」という、一面的には軟弱で役に立ちそうもない志向に落ち込むことが度々である。しかし、人は、たのしみが無ければ生き続けることはできない。それもまた紛れもない事実であろう。わたしたちはこのような不条理を前にして「行動」の二文字を肝に銘じ、いまだよちよち歩きではあるが、ここに、ものがたり観光行動学会誌第1号を発行する。

ものがたり観光行動学会 役員名簿

【2011年9月25日現在】

会 長	白幡洋三郎 (国際日本文化研究センター)
副 会 長	加藤 晃規 (関西学院大学)
副 会 長	高田 公理 (佛教大学)
理 事	太田 博一 (太田博一建築・都市デザイン)
同	奥坊 一広 (トラベルニュース社)
同	熊谷 真菜 (日本コナモン協会)
同	野崎 英之 (ウェブ編集者)
同	松井 宏員 (毎日新聞社)
専務理事	李 有師 (大阪千代田短期大学)

ものがたり観光行動学会誌

ものがたり観光 Narrative Tourism 第1号

印刷 2011年9月25日

発行 2011年10月1日

発行/ものがたり観光行動学会

編集代表/ものがたり観光行動学会誌編集委員長 加藤晃規 (関西学院大学)

ものがたり観光行動学会

会長 白幡洋三郎 (国際日本文化研究センター)

事務局 〒530-0047 大阪市北区西天満5-10-17 西天満パークビル6階

TEL 06-6311-3325

FAX 06-6311-2949

✉ ikko@travelnews.co.jp (株式会社トラベルニュース社内)

デザイン・印刷/株式会社シンカ・コミュニケーションズ

〒586-0009 大阪府河内長野市木戸西町1-5-7

TEL 0721-52-5934 FAX 0721-53-3859

URL <http://www.cinca.jp> ✉ anata@cinca.jp

2011年10月1日発行

